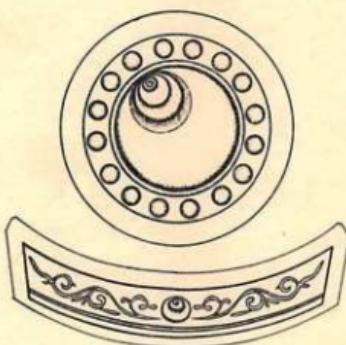


円明寺(延命寺)遺跡 発掘調査報告



1971年3月

広島県教育委員会

序 文

今回発掘調査を実施した円明寺遺跡の存在する佐伯郡五日市町一帯は、広島市の西の玄関口にあたり、近年人口の集中が激しく、住宅化の傾向の著しい地域である。

このため瀬戸内沿岸的主要幹線道路である国道2号線は、朝夕のラッシュ時には交通マヒの状態となり、この緩和対策は緊急の問題となっていた。そこで、建設省広島国道工事事務所では、この交通マヒ解消のため、西広島バイパスの建設を検討するところとなった。西広島バイパスは朝夕のラッシュ時において特に交通渋滞のひどい広島市草津町付近および佐伯郡五日市町、廿日市町の交通緩和を目的としており、広島市の己斐町から草津町、佐伯郡五日市町の山裾を通り佐伯郡廿日市町地御前にぬけるものであった。

この地域は、瀬戸内海に面し、日当たりもよいところから古くより人々が住みついた地域であり、当時の遺跡や遺物が相当数存在するものと予想される地域であった。その後、バイパス計画地内の分布調査を行なった結果、縄文時代の遺跡であり、また、鎌倉時代の寺院跡ともおもわれる円明寺（延命寺）遺跡が存在することが確認された。広島県教育委員会としては遺跡の保存について建設省と再三再四にわたり協議したが保存がむつかしいことからやむをえず事前の発掘調査にふみきった。

昭和45年10月1日から開始した発掘調査は、松崎寿和団長をはじめとする調査員各位の多大な努力により、所期の目的以上の成果をあげることができた。

ここにその調査の報告書を刊行することにより、いさかでも研究資料として活用されれば幸いである。

報告書作成にあたって、調査員をはじめ建設省広島国道工事事務所、五日市町教育委員会および旧土地所有者など多くの方々の協力をえたことに対し、ここに深く感謝の意を表するものである。

昭和46年3月31日

広島県教育委員会

教育長 宮 地 貫 一

円明寺(延命寺)遺跡発掘調査報告

目 次

I 遺跡の位置・環境	1
II 調査にいたる経過	4
付発掘調査日誌	
III 調査区の設定	12
IV 調査区および遺物包含層の状態	14
V 調査区における遺構・遺物出土の概況	17
VI 遺 構	20
建築跡遺構	20
VII 遺 物	25
a. 縄文式土器	25
b. 石 器	31
c. 瓦	36
d. その他の遺物	40
VIII 総 括	47

擇 図 目 次

第1図	円明寺遺跡と周辺遺跡位置図	(2)
第2図	西広島バイパスと調査遺跡	(5)
第3図	調査区配置図	(12)
第4図	調査区断面図	(15)
第5図	C—2区疊群実測図	(18)
第6図	建築跡造構実測図(1)	(21)
第7図	建築跡造構実測図(2)	(23)
第8図	縄文式土器拓影(1)	(26)
第9図	縄文式土器拓影(2)	(27)
第10図	尖頭器・石鎚実測図	(32)
第11図	石器 実測図	(34)
第12図	軒丸・軒平瓦拓影	(37)
第13図	軒丸・軒平瓦断面および鬼瓦実測図	(38)
第14図	丸瓦 実測図	(39)
第15図	土師質土器実測図	(40)
第16図	陶器・瓦質土器実測図	(41)
第17図	石製品・土製品実測図	(42)
第18図	鐵器類実測図	(43)
第19図	弥生式土器実測図	(43)
第20図	土師器・須恵器実測図	(45)
第21図	古 线 拓 影	(46)

図 表 目 次

第1表	五日市平野の縄文早期遺跡一覧表	(3)
第2表	縄文式土器区別出土表	(30)
第3表	石器出土表	(35)
第4表	軒丸瓦分類表	(40)
第5表	軒平瓦分類表	(40)
第6表	土錐一覧表	(43)

図 版 目 次

図版1	a. 遺跡遠景 b. 遺跡近景
図版2	a. J—3区東壁断面 b. I—6区北壁断面
図版3	遺物出土状態 (1. 押型文土器 2. 条痕文土器 3. 石錐)
図版4	遺物出土状態 (1. 石錐 2. 石匙 3. 石鏟)
図版5	a. 建築跡遺構 (1) b. 建築跡遺構 (2)
図版6	遺物出土状態 (1. 土師器 2. 軒平瓦 3. 備前焼 4. 軒丸瓦)
図版7	a. 山形押型文土器 b. 橋円押型文土器
図版8	a. 条痕文・無文土器 b. 石錐・尖頭器
図版9	a. 石匙・スクレーパー・石錐 b. 土師質土器
図版10	a. 軒丸・軒平瓦 b. 軒丸・軒平瓦・鬼瓦
図版11	a. 印判 b. 陶器・瓦質土器
図版12	a. その他の石器類 b. 弥生式土器・土師器・須恵器

凡 例

- I 本報告書は、建設省の行なう西広島バイパス建設に伴う緊急発掘調査の報告である。
- II 発掘調査にあたっては、広島県文化財専門委員・広島大学文学部教授松崎寿和が団長となり、費用は建設省から委託をうけて広島県教育委員会が主催した。なお、建設省広島国道工事事務所および五日市町教育委員会、また、円明寺をはじめとする旧土地所有者の方々の援助によるところが多かった。
- III 本報告は、伊吹、是光、鹿見、中田の分担執筆により、河瀬が編集した。
- IV 出土遺物の整理、実測は上記の者のほか、金井、脇坂、山県があたり、奈良井晶子、川崎真木子の協力をうけた。
- V 表紙カットは、出土軒丸・軒平瓦の復元図である。

I. 遺跡の位置・環境 (図版1・第1図)

円明寺遺跡は広島県佐伯郡五日市町大字三宅字円明寺原にある。

本遺跡のある五日市平野は、ほぼ南西から北東にのびる二つの山地—西側に恋ヶ岳、極楽寺山地、東に武田山、鈴ヶ峯山地—にはさまれた平野で、地形的には八幡川、石内川、三筋川に沿った八幡川低地、可愛川、御手洗川、岩戸川が形成した廿日市低地および極楽寺山地東南麓に擴がる觀音台地よりなる。觀音台地は極楽寺山地より流下する河川の土石流性堆積物で構成される扇状地、台地、段丘よりなる地域で、台地、段丘は中位、下位、低位の三段に分けられる(1)。

本遺跡はこの台地の低位面上に立地し、海拔高度約50m、平野との比高約40m、海岸からの直線距離は約1.7kmの地点にある。南には極楽寺山地より流下する谷川があり、東にむかってはゆるやかに傾斜して、やがて八幡川、三筋川流域の沖積低地に至る。北側は低い段丘崖をなし、地形・水利・日射その他、居住上の自然的地理条件について、もっとも好条件の地域の一つに立地するといえよう。

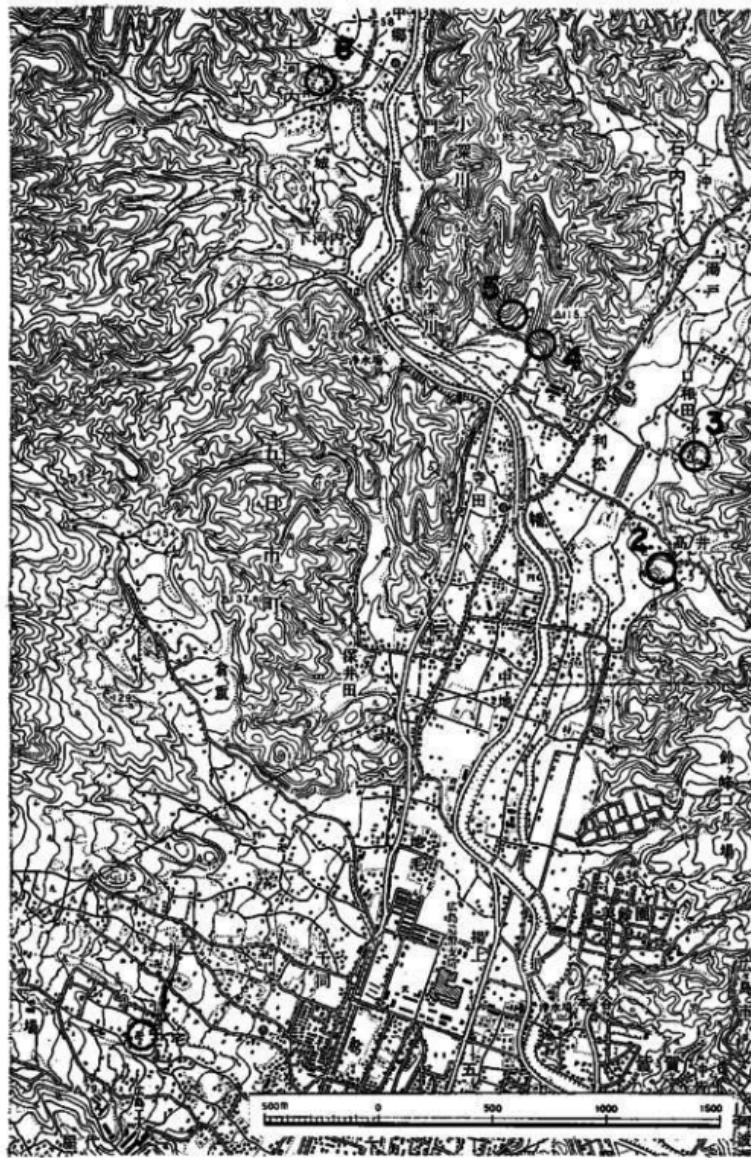
豊元國の報告によると、ここからは軒丸瓦、軒平瓦、青銅製鉢金具、須恵器、土師器等が出土し、鎌倉期の寺院跡であるとされている(2)。

ところが、1969年10月本遺跡の北方、大字坪井千間にあった寺山遺跡群の発掘調査の際、今田三哲氏より五日市町立觀音小学校の生徒がここで有舌尖頭器・石鎌等を見出したとの話を聞き、寺院跡であると同時に、縄文早期の遺跡でもあることを知った。八幡川、石内川の流域には、本遺跡のほかに5つの遺跡が分布している(第1表)。これらの遺跡は周囲の山地より、冲積低地に移る傾斜変換線附近、あるいは扇状地上に立地している。

利松住吉遺跡は、1966年9月に緊急調査が行なわれ、川越哲志氏は広島市牛田町早稻田神社境内の早稻田山遺跡に併行する時期の遺跡と考察している(3)。

同氏の報告によると、高井遺跡からは小菖島式土器片、石鎌、弥生式土器、石庖丁、古墳時代遺物が出土し、石鎌は早稻田山遺跡出土の石鎌に共通した特徴をもつとしている。さらに、寺田遺跡からは条痕文をもつ土器片が、大歳遺跡からは、弥生式土器、石鎌とともに、山形押型文土器片1が出土して、大歳遺跡の押型文土器は利松住吉遺跡出土のそれに相当すると報告している(4)。

河内遺跡はごく最近、附近の小中学生が発見した遺跡で、五日市町大字河内字下城に建設中の農道の切り通し断面より弥生式土器片と条痕文土器片が出土したといわれている。これらの



第1図　円明寺遺跡と周辺遺跡位置図

第1表 五日市平野の縄文早期遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡の位置	立地条件	海拔高度	沖積低地との比高
1	円明寺遺跡	佐伯郡五日市町三宅字円明寺原	低位段丘面	約 50m	約 40m
2	高井遺跡	佐伯郡五日市町高井	扇状地扇端附近	約 30m	約 20m
3	利松住吉遺跡	佐伯郡五日市町利松住吉	扇状地扇端	約 20m	約 10m
4	寺田遺跡	佐伯郡五日市町寺田	扇状地扇端附近	約 30m	約 20m
5	大歳遺跡	佐伯郡五日市町大歳	扇状地扇頭	約 40m	約 30m
6	河内遺跡	佐伯郡五日市町河内下城	谷底平野と山地の傾斜変換線附近	約 80m	約 15m

遺跡から出土する石器、スクレーパーは安山岩製で、ここから最も近い距離の安山岩の产地は、西北西、約25kmの山口・広島県境の鬼ヶ城山、横山で、距離的にはそこから原石が運搬された可能性が強い(6)。

最後に、寺院跡としての本遺跡の位置については、今のところほかに鎌倉期の古瓦を出土する地点は知られず、詳細にしがたいが、五日市平野には条里地割の残存が報告されている(7)。古代山陽道は安佐郡沼田町伴附近に想定される伴部駅から、石内川に沿って南下し、観音寺地を横断して、佐伯郡廿日市町平良附近の種籠駅に達したとされており(8)。古くから、中央文化の伝播するルート上の一地点であったといえよう。

(伊吹尚)

- 注 1. 建設省国土地理院「土地条件調査報告書(広島地域)」(1969)
 　　〃 「2万5千分の1土地条件図 広島」(1969)
2. 広島県立府中高等学校地歴部「広島県古瓦発見地名表」
 　　(府高学報1『広島県の考古学的叢書調査』 1954)
- 3.4. 川越哲志「広島県佐伯郡五日市町利松住吉遺跡の調査」
 　　(『広島大学文学部紀要』第28巻1号 1968)
5. 木下 忠「石器と交易」(芸備地方史研究会『広島県今と昔の産業』 1958)
- 瀬見 浩「広島市早橋田山遺跡の発掘調査報告」(『広島考古研究』第2号 1960)
- 6.7. 『新修広島市史』 第1巻総説編(1961)

II. 調査にいたる経過

円明寺遺跡は、鎌倉時代の瓦、唐草瓦、青銅製筒金具、須恵器、土師器が出土し、礎石が存在する伝延命寺址として、1954年に発行された府高学報Ⅰの『広島県の考古学的基本調査』の中で「広島県（備後・安芸）古瓦発見地名表」の一つに加えられていた。また、『広島県埋蔵文化財包蔵地名表』の中にも、今田三哲氏により延命寺址として同様のことが報告されている。

この円明寺遺跡のある五日市町の町街を走る国道2号線は、中国地方における一大産業都市広島の西部の入口にあたり、海と川にはさまれた町街が東西に走っている。その道路は非常に狭く、かつ交通量は日増しに急増し、沿岸線の開発に伴って、今後更に深刻となることが予想されていたし、何らかの対策が必要となっていました。そうした矢先、昭和41年6月頃、新聞紙上に一般国道2号線西広島バイパスが計画されていることが報道された。

このため広島県教育委員会は、計画地内に含まれる可能性のある沿線の遺跡を検討するため、直ちに建設省広島国道工事事務所に赴いた。そしてその詳細な計画書をもとに、今後の方針について協議し、遺跡が計画地内に含まれる時には速やかに広島県教育委員会に知らせ、協議をするよう要望した。

その後、1969年10月円明寺遺跡の北、大字坪井千間にある寺山遺跡群の緊急発掘調査の際、調査員の一人今田三哲氏から、同氏の勤務校である五日市町立観音小学校の生徒が、円明寺遺跡で有舌尖頭器や石鎚等を発見したということを知らされた。このことにより円明寺遺跡が鎌倉時代の寺院址であるとともに縄文時代の遺跡でもあることを知った。

そして1970年1月28日、今田氏の案内で円明寺遺跡に赴き、遺跡の場所を確認し、その時採集した石鎚等により現円明寺に関係する円明寺跡であるとともに縄文時代早期の遺跡でもあることを確認した。

一般国道2号線西広島バイパスが昭和41年に計画されて以来、5年目の昭和45年4月、計画の初段階では、予定路線から外れるとおもわれていた円明寺遺跡が、予定路線内に含まれることがあきらかになった。そのため広島県教育委員会は、同年4月中旬から5月上旬にかけて、たびたび協議を重ね、予定路線を変更して遺跡を外し文化財を保存するよう、強く要望した。

また同年5月27日広島県教育委員会社会教育課において、埋蔵文化財部会を開き、遺跡の取り扱いについて協議した。その結果基本的な立場としては、予定路線を変更させ、遺跡を保存することであるが、現段階では路線変更是むづかしく、やむをえず、発掘調査をすることにな

ろうが、多少の路線変更の可能性もあるので、とりあえず、現地にて広島国道工事事務所と協議することになった。

5月29日、広島県教育委員会専門員兼文化財係長西本省三、文化財保護主事河瀬正利、指導主事足光吉基の3名は、建設省広島国道工事事務所長同行のもとに現地において協議を行なった。

ここでは広島県教育委員会としては ①、設計変更により路線変更ができないか ②、路線変更が不可能ならば、設計では盛土になっているのを高架にするなどの工法の変更はできないかの2点について意見を提案した。しかし、建設省としては、この地域には小川や道路があり、これらと交差させるため、かなり大きな構造物（ガード）をつくる必要があることと、用地の買収について、すでに所有者の了解をえてること、また、国道バイパスであるため最少曲線半径を大きくする必要があることなどから設計変更がむつかしいという意見であった。

その後、広島県教育委員会と建設省とで再三協議を重ねたが、遺跡の保存はむつかしいということであり、結局事前に発掘調査を行なうことになりました。



第2図 西広島バイパス（破線内）と調査遺跡

この結果、6月2日には建設省中国地方建設局広島国道工事事務所長から広島県教育委員会教育長あて、円明寺遺跡の発掘調査を依頼され、事前発掘調査の委託契約を締結し、10月1日

より発掘調査を実施することに決定した。

調査にあたっては、松崎寿和広島大学教授を団長とするつぎの調査団により実施した。

(団長) 松崎 寿和	広島県文化財専門委員 広島大学教授
潮見 浩	広島県文化財専門委員 広島大学助教授
川越 哲志	広島大学助手
福井 万千	広島大学教務補佐員
鵜駿 治雄	三次市文化財保護委員
池谷 章	三次市文化財保護委員
今田 三哲	五日市町立観音小学校教諭
福谷 昭二	広島県立観音高校教諭
善入 義信	広島市立工業高校教諭
本家 正文	広島県教育委員会社会教育課長
西本 省三	広島県教育委員会専門員兼文化財係長
河瀬 正利	広島県教育委員会文化財保護主事
金井 亀喜	広島県教育委員会指導主事
伊吹 尚	広島県教育委員会指導主事
是光 吉基	広島県教育委員会指導主事
山縣 元	広島県教育委員会指導主事
脇坂 光彦	広島県教育委員会指導主事
鹿見啓太郎	広島県教育委員会指導主事
中田 昭	広島県教育委員会指導主事

なお、この外地元の森本徳、見玉久、延命寺住職慈永道雄、円明寺住職菅梅素弘の各氏、広島大学学生、廿日市中学校、廿日市高等学校砂谷分校の学生の協力を得た。

(中 田 昭)

発掘調査日誌

10月1日（木）晴

佐伯郡五日市町大字三宅のバイパス予定路線に所在する円明寺遺跡において、午前11時より総入式を行なう。建設省、五日市町の各関係者、松崎調査団長外數十名が出席する。その後、円明寺遺跡実探の遺物をみる。

10月5日（月）晴

発掘調査地域全域の草刈りを行なう。その後、バイパス予定路線北側境界の杭を基準として、グリッドの設定を行なう。グリッドは東西にA、B、C……南北に1、2、3……とし、 3×3 mで2mの間をとる。本日は、A—3、4区、B—2、3、4区、C—3、4区、D—3、4、5区を掘り始める。表土を取り除くと比較的浅い部分に小礫が点在しているのが認められたが、寺跡に關係するものかどうか現在のところ不明である。

10月6日（火）晴

昨日の調査で見出された小礫は浅い部分にあり、規則性が少なく造構としてとらえ難いので取り除いて掘り進む。E、Fの各3、4、5区を掘り始める。E—5区、F—4、5区等において磨石かと思われる石列が点々とみいだされたが、今のところ造構としてとらえられない。C—3区は地山底上までねば掘り下げ、地層の構成の概要を知る。

10月7日（水）晴

E—5区、F—4、5区にみられる石列の配置をみると各トレンチの間壁を取り除く。A—4区では地山が急に落ち込んでいるようで多量の株生式土器片がみられたが、土器や須恵器、龜山焼片等が存在し、かなり擾乱を受けているようである。B—4区より押型文土器片が出土し、縄文時代の遺物は特に1/200の平板測量間にレベルと位置を記入することにした。

10月8日（木）晴

E—3、4区の間壁を取り除き石列を追う。F—3区抜張部にかなり大きな礫石が存在し、その礫石の上に少し西端の方で小礫と瓦が散在していた。新たにH、I、J、K、Lの各5区、Iの6区を掘り始める。I、J区等は礫が多く、F区等に比べると一段と低い所にあるため、地山が直ぐあらわれた。

10月9日（金）曇

E—3区を北に抜張する。小礫がE—3区の北端より北抜張部に続いてみられるが、この小礫はF—3、4区等でみられる礫石と多少異なり、角ばったもので自然石の感が強かった。小礫に混じって押型文土器片が出土する。F—3区西抜張部にも小礫が群在し軒丸瓦片を混入していた。J、Kの6区、I、Jの7区を掘り始める。

10月10日（土）暴風雨

F—3、4、5区の西抜張部を続けて掘り進む。小礫が續き瓦が混在している。H—5区において削円の

押型文土器片（口縁部を含む一全体の土器）が出土する。I、Jの7区は一応地山直上まで掘り下げるが、遺物、遺構とも特に目立ったものはみられなかった。

10月11日（日）雨後晴

F—3、4、5区西抜張部の礫石群を追うため、それに統けてG—3、4、5区を掘り始める。礫石は統いてみられた。H—5区では押型文土器片の他、実質条痕文土器片が出土し、地山直上まで掘り下げたので一応H—5区の調査を終える。

10月12日（月）雨

発掘現場に出かけるが、降雨のため作業ができず中止する。遺物、画面等の整理を行なう。

10月13日（火）雨後晴

F—3、4、5区の連続した東壁の南北の断面の実測を行なう。実測の後、礫石の配列をみるためE—3、4、5区と連続させることにし、取り除く作業を行なう。

10月14日（水）晴

E、F、Gの3、4、5区それぞれの間壁を取り除き、調査区全体を平坦に約10cmばかり掘り下げる。礫石は多數散在し、まとまりは定かではないが、特に調査区の周縁部に多いようである。

10月15日（木）晴

E—3、4、5区を東側に傾いた境界線の石垣のそば近くまで、E、F、Gの5区を南側の石垣まで抜張し、全面を一様に掘り下げる。列石や礫石は、E、F、Gの各5区とGの3、4、5区に特に多く、回廊か施設などの寺院跡の遺構と考えられた。

10月16日（金）雨後晴

C、D、E、F、G、H、Iの各1区、E、F、G、Hの各2区を掘り始める。C—1区の中央に東西に走る石列と多少の段を持つものとおもわれる落ち込みがみられ、D—1区に続く灰褐色の土の色の変化と連続しているかと考えられた。しかし、これを西に延長したF—2区には同じレベルでもその変化は認められなかった。またD—1区においては石列がその北寄りに、東西に走っている。

10月18日（日）晴

I—3区、I、J、K、Lの各1区を掘り始める。I—1区において基壇状の落ち込みが南北に走り、I—1区に向って西に折れているようであったが、建築はの基壇よりもむしろ傾の跡とおもわれた。I—6区は地山まで掘り下げているとおもわれたが、大小の礫を混入する黒味を帯びる灰褐色土を調査したところ、条痕文土器、無文厚手土器、スクレイバー等出土し、地山はこの区より急に落ち込んでいるものとおもわれた。

10月20日（火）晴

J—1区を掘り始めるが、地表から30~40cm程度の深さで地山が露出する。J—1区北東隅より標に押しつけられたような形で土師器2個体分と石器が出土する。K—1区は約1mぐらいで地山にたっする。

I-1区もほぼ同じレベルで地山直上に焼土らしきものがあらわれる。

E-2区は、C-1区、D-4区の列石との関係をみるため、ほぼ同じレベルまで掘り下げたが、何の遺構も認められなかった。

I-5、6区を続けて掘り下げる。I-6区で表裏朱赤文土器片が出土し、黄褐色土で大小の礫が多くあらわれ、地山相当面近くかと考えられたが、もう少し掘り下げてみる必要がある。

10月21日（水）晴

I-1区南端部でみられた焼土の範囲をあきらかにするため、南と西を拡張する。

J-1区においては東から南へかけての落ち込みがみられたので、東と南を少し拡張するが、遺構と認められなかつた。

J-3区を掘り始める。

10月22日（木）晴

H-3、I-2、J-2区の調査を始める。

I-1区の焼土らしきものを写真撮影の後掘り始めたが、丸釘等が出土し新しい時代のものと思われた。

10月23日（金）晴

J-3区に焼土らしきものがみられたので、J-2区との間壁を取り除き焼土を追うが、焼土と思われたものは荒乱された状態の赤土であった。

H-6区を掘り始める。

10月24日（土）晴

寺院跡の遺構の検出された部分の西側（G-3、4、5区の西側）を烟の境界線まで拡張する。また南側部分は石垣まで拡張しているが、石垣の構築によってかなり覆されているようである。

D-5区の東側を拡張し、列石の検出につとめたが、礫が点在しているのみで明瞭でない。

K-6区の南寄りに掘り込みがみられたので南に拡張してその全容をあきらかにする。径20~30cm、深さ約20cmぐらいの円形の堅穴で、中に礫石に混じって炭化物と土師質土器がつまっていた。

J-3区は南端で急な落ち込みがみられ、遺物も特に多くみられるようである。

10月25日（日）晴後曇

寺院跡の遺構部分で露出している石の清掃を行なう。

J-3区の落ち込みが基壇となるかどうかを検討するため、西側に拡張する。落ち込みは拡張部で北側に延びるようであるが、これを基壇とするにはあまりにも土質が軟弱であった。南端の落ち込み部分よりかなり多量の条痕文土器片が検出された。

10月26日（月）晴

各区の東壁、北壁の写真撮影、断面図作成（縮尺1/10）のため、清掃を行なう。

C-3区は東半に掘り込みがみられたので、ひきつづきB-3区を清掃したところ西半に円形の掘り込みがあったが、今のところ何らかの遺構としても両区を関連づけられないでの、間壁を取り除いて両者の関係

をみることにする。

10月27日（火）晴

E、F、Gの各2区、G-1区を掘り下げる。

G-2区において石列が南北に走り、G-1区の砾石の遺構と何らかの関連があるものとおもわれたが、

G-3、4、5区等にみられる石敷遺構と連続した遺構であるかどうかは今のところあきらかでない。

C-2区を掘り始める。東端に砾石の集積したところと、その西に円形のピットが露呈した。

10月28日（水）晴

C-3区とB-3区の間壁を掘り下げる。G-2区を南に約2m拡張して砾石を追う。K-1の2区を掘り下げる。K-2区は地山に達する。

10月29日（木）晴時々小雨

B-3区、C-3区の間壁を掘り下げるも遺構としての関連は全くつかめなかった。

A区より順に各区の東壁、北壁の断面図の実測と写真撮影を開始する。

J-3区を南に拡張する。

寺院跡部分の石敷遺構の清掃を行なう。

遺跡周辺の平板測量を開始する（縮尺 1/200）。

10月30日（金）曇時々雨

G-2区において石列が露呈していたが、これに平行したような形でH-1区に石敷列がみられるので、各区の間壁を取り除くことにする。

10月31日（土）晴

G-1、2区、H-1、2区の各区の北壁、東壁の写真撮影、実測の後、間壁を取り除き石敷列の検出につとめる。

J-2区の北東隅に黒褐色の掘り込みがみられたので拡張して調べることにする。

11月1日（日）晴

G-1、2区、F-1、2区の石敷列遺構の清掃を行なう。

J-1区、J-2、3区の北壁、東壁の写真撮影、断面実測の後、間壁を取り除きJ-2区北東隅の掘り込みの範囲をあきらかにする。

寺院跡の石敷遺構の清掃を拭けて行なう。

11月2日（月）晴

J-2区北東隅にみられた掘り込みは直径約2mぐらいのはば円形の堅穴であるが、上部に砾石が数個集積していたので、埋葬か何かの堅穴かと考えられたが、地山を掘り込んだこの堅穴からは何ら遺物は検出されなかった。

K、Lの2、3区、Lの4区を掘り始める。またK-3区はJ-3区を西に拡張しているためグリットを設けられないので、第1トレンチとして約2m×5mを設定する。

11月3日（火）晴

E、F、Gの各3、4、5区にみられる寺院跡の遺構の写真撮影を行なうため、ヤグラを組み写真を撮る。その後通り方を打つ。

L—3区、第1トレントの南拡張部を掘り下げる。やはりJ—3区と同じく地層は急に深くなっているようである。

11月4日（水）晴一時雨

寺院跡の通り方の水糸を振り終る。

H—1区の北を約5mばかり拡張して石敷遺構の北辺端の状態を検討する。

11月5日（木）晴

E、F、Gの各3、4、5区の寺院跡遺構の平面実測を開始する（縮尺 1/10）。

F、G、Hの各1、2区にみられる遺構の清掃を行なう。

11月6日（金）晴

南側寺院跡遺構の平面実測を続けるとともに北側寺院跡遺構の清掃を続ける。

11月7日（土）晴

北側寺院跡遺構の石敷の清掃を行ない写真撮影にそなえる。

11月8日（日）晴

南側寺院跡遺構の平面実測を続行するとともに、北側寺院跡遺構の写真撮影のためヤグラを組む。

11月9日（月）晴

南側寺院跡遺構の平面実測を終了する。なお北側寺院跡遺構については通り方を設定する。

11月10日（火）晴一時雨

北側寺院跡遺構の平面実測にかかる。なお南側寺院跡遺構を1/40の縮尺で平板測量を行なう。

11月11日（水）晴

北側寺院跡遺構の平面実測を終了する。

C—1区の石列遺構とC—2区の円形ピットと石組遺構の平面実測を行なう（縮尺 1/10）。

11月12日（木）晴

各区の北壁、東壁の写真撮影と断面実測を点検する。

また南側寺院跡遺構については礫石の小さいものを取り除き若干掘り下げて遺構を確認する。北側寺院跡遺構を1/40の縮尺で平板測量する。

11月13日（金）晴

南側寺院跡遺構を実測図に書き加えるとともに清掃を行ない、南側と北側の寺院跡遺構の関連写真を探り、本遺跡の調査を終る。

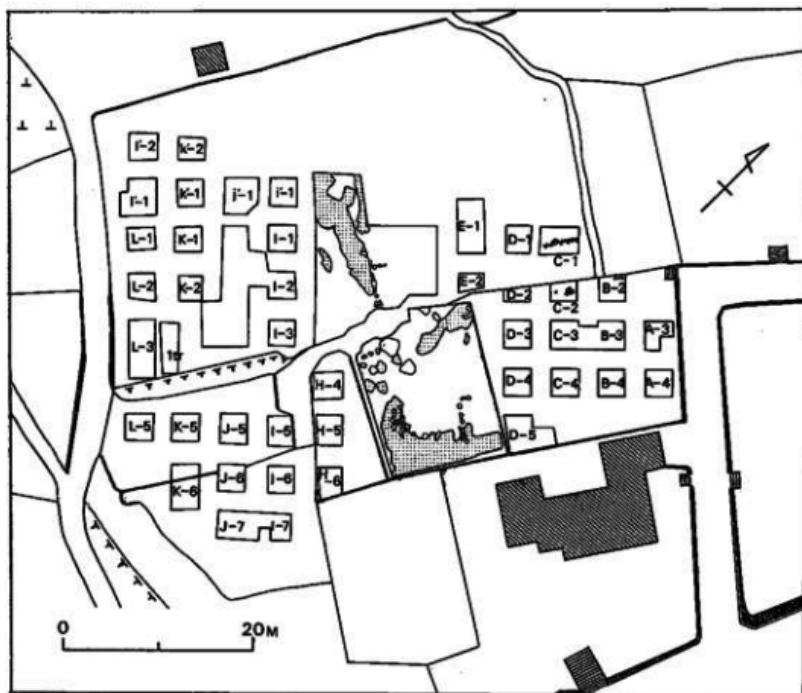
（中 田 昭）

III. 調査区の設定（第3図）

円明寺遺跡の周辺は、近時、宅地化の影響を随所にわたってうけており、すでに本遺跡の南方および東方には住宅が密集してきている。また、土取工事も各所においてなされているが、わずかに西方の田園および遺跡の存在する円明寺前面の一帯が畠地として耕作されているような状況にある。しかしながら前述したように、ここに一級国道2号線西広島バイパスが通過することになり、やむなく発掘調査を実施することになった。

本遺跡の範囲については、遺物の分布状態からみると、東と南側の両端は、畠地の石垣を境とし、西は谷際まで、また、北側は円明寺境内部分の石垣にいたる約2,700m²が包蔵地と考えられた。

調査区の設定にあたっては、縄文時代早期の遺物が出土していることと、寺院跡の存在とを



第3図 調査区配置図（アミ目は疎群）

考慮し、できるだけ多くのグリッドをもうけることにした。

まず、バイパス計画路線の北端を基線として、 3×3 mのグリッドを2m間隔に設定し、東西軸方向のそれには東から西に向って、A・B・C・D……I・G・K・L区の名称をつけた。一方、南北軸方向のグリッドに対しては、北から南に向って1・2・3……6・7・8区とした。さらに、H-1区から北側に計画路線が張りだしているために、同様のグリッドをもうけ、東西軸には東からh・i・j・k・l区とし、南北軸方向には南から北に向って1・2区として呼称した。しかし、そのうちのA-1・2・3区、B-1、2区、C・D・E・F各2区、H-6区、I・G・K・L各4区については、柵の境界にかかっていたり、ベンチマークがあったりしたために部分的あるいはそのすべての調査を放棄しなければならない状態になってしまった。

その後、調査の進捗とともに、建築跡遺構が発見されたE-3・4・5区、F-3・4・5区、G-3・4・5・6区およびFF1・2区、G-1・2区、H-1・2・3区、h-1区にわたる範囲は全掘して、遺構をあきらかにさせることができた。さらに、計画路線外部分で集中的に疊が存在していたということを地主から教示を得たので、その了解のもとにe-1区を設定した。しかし、他のグリッドと同様な状態で、遺構は良好に残存していなかった。

また、比較的搅乱の少ないと考えられたJ-2・3・4区、L-1・2・3区については、グリッドができるだけ抜張し、出土遺物の層位を十分把握することにつとめるとともに、同様の目的のもとに 2×5 mのトレンチ（第1トレンチ）をK区・L区との間に設定した。しかしながら、その状態は良好でなく、かなり搅乱されていた。

結局、今回の調査では、寺跡遺構が存在すると考えられる地域については、路線幅内全域の調査を実施し、遺構の残存状態をみた。また、縄文時代遺物を包含する地域については $3 \text{ m} \times 3 \text{ m}$ のグリッドを設定して行ない、調査総面積は約 850m^2 におよんだ。

（是光吉基）

IV. 調査区および遺物包含層の状態(図版2、第4図)

各調査区における遺構では、建築跡の遺構があきらかにされたB・C—各2区、E—3~5区、G—1~6区、H—1~3区、h—1区のほかには良好な遺構はみとめられず、わずかにC—1区で検出された石列があげられる。

石列は、長さ約3.8m、幅30~40cm、高さ15~20cm、方位はN36°Eを測るもので、約20~30cm前後の河原石を主にして二列に併置しており、石列の北側はやや高く、また、かためられている。しかしながら、その差は微妙なもので、一部では逆の状態を示しているところもあって、積極的にその差を論ずることはできない。遺物は数点ではあるが瓦片が含まれていた。本遺構は、前記した建築跡との有機的な関連はなさそうで、特に石の配置状態においては大きな差異がみとめられる。つまり、建築跡におけるそれは石の面をそろえて構築しているのに対し、本遺構の場合は、まったくその配慮がなされておらず、なにか区画的な性格を有しているようにみうけられた。

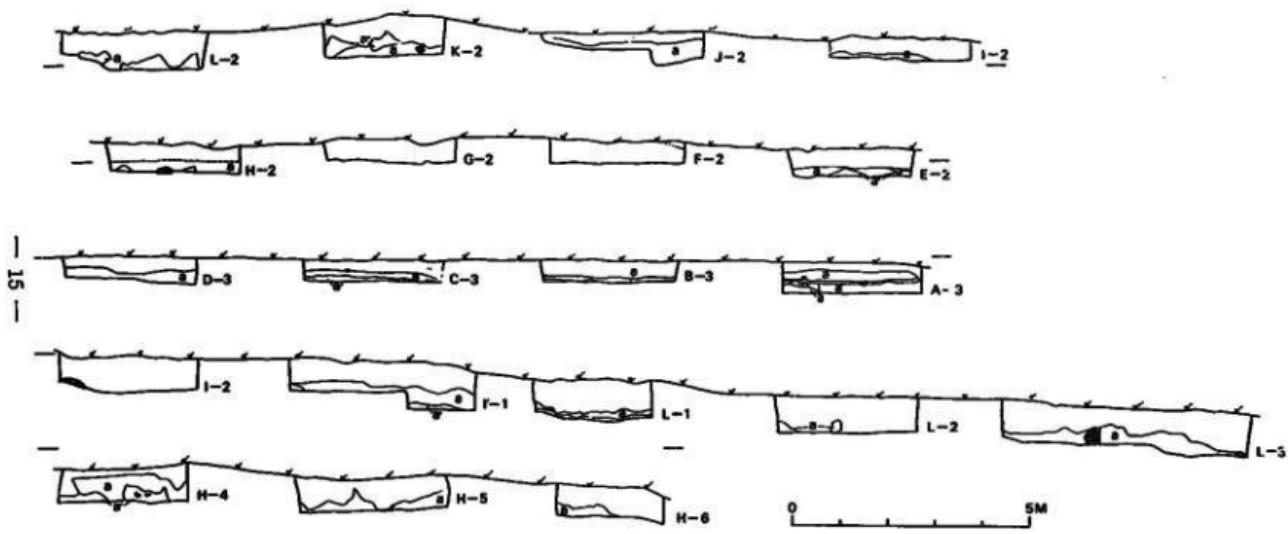
一方、本遺跡における土層についてみると、A~D—各1区、E~G—各1・2区、H~L—各1~6区、e・h—1~各1・2区およびA~C—各2~4区、D~G—各3~5区とでは、層の状態においてかなりの差が認められる。このような事実は、基盤までの土層が非常に浅いということと土地利用の差があったことを示しているものであろう。

A区では、第I層に褐色を呈す耕作土、第II層に灰褐色粘質土、第III層に鉄分を含む赤褐色土、第IV層に暗褐色土の4層がみとめられ、これらは第3区から第4区へと緩傾斜をなしていいるが、第4区の北よりでは第IV層の暗褐色土が落ち込んでいる。

第II層にあたる灰褐色粘質土は、往時水田として使用されていた際の耕作土と考えることができ、第III層の鉄分を含む赤褐色土は床土であろう。このことは、前者に該当する区域全体が水田であったことを示している。遺物は、第IV層の暗褐色土から出土している。

B・C区も、A区とほとんど同様の層位を示しており、第4区では、やや緩傾斜をなして続いている。また、遺物の出土層位もA区と同等の状態にある。これに対し、D・E・F区における層は水平位の状態にあり、この層の状況より調査によって検出された建築跡遺構の東端は、A・B・C—各4区を境界にして建立されていたと考えられる。

H~L—1・2・3区にかけての層は、2ないし3層にわけられ、その層序は第1層に褐色耕作土が第II層には灰色を呈すマサ土が、第III層には黄色のマサ土がみとめられる。これらの層は西方から東方へ、北方から南方へと緩傾斜をなしているが、H・I—3区では第II層が一



第4図 調査区断面図 (aは包含層、a'は包含層上・下層)

段落ち込み、そこから平坦な面が続いている。これについては焼の境界にあたるものであろうとおもわれた。

また、出土遺物と層位との関係についてながめてみれば、縄文早期の遺物が多く検出されたJ・K・L区では2層にわけられる。比較的良好な層位を示すJ区の第I層は、北よりで深さ40cm、南で60cm前後をはかり、やや傾斜して続いており、この層には、かなり耕作の手が加わっている。第II層は、70cm前後の厚さをはかり、遺物はこの層から検出された。しかしながら、遺物は層位的にわけることはできず、二次的な堆積状態を呈している。

また、H-5区、I-6区も同様の状態で、H-5区では第I層に褐色土、第II層には黄褐色を呈すマサ土があり、遺物は第I層のなかほどから第II層の下端にかけて出土している。I-6区では、3層がみとめられ、北から南へとわずかに傾斜をなしている。第I層には、この付近通有の褐色土層が、第II層にはややマサ土まじりの灰褐色土層があり、第III層は、15~30cm前後の疊を含む黄褐色土である。

遺物は、この第III層からの出土が圧倒的に多くみいだされているが、出土遺物は層位的にわけることはできず、疊間にさまれた状態にあった。そのために、遺物は定位に存在していくものではなく、J・K・L区では北西から南東方向へ、およびG-4区、H-5区、I-6区では北方から南方へと2次的に堆積をしていったものではないかと考えられる。

(是光吉謹)

V. 調査区における遺構・遺物出土の概況 (図版3・4、第5図)

円明寺遺跡の発掘調査は、遺跡の包蔵範囲、約2,700m²のうち、バイパス計画路線にかかる約1,700m²の幅内に63グリットを設定して、824m²について調査を実施することができた。全般に基盤までの土層は浅く、耕作時における搅乱の度がかなり違っていたために、各調査区において遺構が検出される可能性については、あまり期待をすることができなかった。

しかし、E-3・4・5区、F-1・2・3・4・5区、G-1・2・3・4・5・6区、H-1・2・3区、h-1区にかけては建築跡の遺構がみいだされ、また、B-2区、C-2区においては建物の根石あるいはコーナー部分と考えられる一部の遺構があきらかにされ、さらに、径34cmをはかる円形ピット、径10cm前後の石の抜取り穴も存在していた。ただ、その全容については、すでに前述したように東、南側の部分が宅地造成のために削り取られていることと、発掘調査が計画路線内という制約をうけたために、あきらかでない点が多いが、本遺構を門跡および築地跡と想定することができ、また、その規模あるいは文献等の検討から円明寺跡の遺構であると考えられるにいたった。これについては、建築跡の遺構として後述した。

一方、他のグリットにおいて検出された遺構で顕著なものは認められず、以下、簡単に各区の遺構、遺物の出土状況について概説しておこう。

A区においては、遺構の存在を認めることができず、また、出土遺物も少なくて、第4区で弥生後期の壺・壺の小破片、縄文早期の横円押型文土器が数点出土したのみである。

B区では、前記したように第2区において建築跡の一部とおもわれる遺構があきらかにされているが、出土遺物はA区と同様に少なく、第4区で山形押型文土器が1点認められた程度である。

C-1区では、長さ約3.8mほど南北方向にのびる石列があきらかにされた。石列の北側は南に対してやや高めで、踏みかためられているようにみうけられたが、建築跡との関連性については構築方法等に差異があるために一考をようしよう。第2区では、前記したごとく根石およびピットが発見されているが、出土遺物は全般に少ない。ただ、第3区において、須恵器編年の中の第II形式の後半に比定される高环・坏が検出された。

D-5区では、E区の建築跡より続く、小疎がグリット南よりにおいて若干認められ、北側よりでは、その下層に溝状の浅い落ち込みが存在していた。しかし、第4区においては溝状の落ち込みは検出されず、遺物も含まれていなかった。

e-1区、E-1・2区にかけては10cm~30cm大の礫が多く存在していたために、調査当初

は築跡との関係に留意していたが、礫のあり方に一定性を認めることはできず、後世、耕作時に隠して集められたものではないかとおもわれた。しかし、建築跡の遺構にあたるH-1区などの礫とともに新に考える必要がある。

F・Gの各区、H-1区、H-1・2・3区にかけては、前記した建築跡の遺構があきらかにされた。全般に瓦類あるいは中世の日用什器、鉄製品が多く、F・G-各5区が特に多く検出された。また、F-4区、G-3・4区では石錆・山形文・条痕文土器が数点出土した。

H区は、縄文時代の遺物が多く、第3区では石錆、第4・5区では、山形文、横円文、無文厚手土器、条痕文土器、石錆、スクレイバーなど縄文時代早期の遺物が出土し、特に第5区が多かった。

I区では、遺構の存在を認めることができなかつたが、第6区において縄文早期の遺物が大量に出土した。出土々器では、押型文土器よりも条痕文土器が圧倒的に多くみいだされた。

J-2・3区では、長径約3.5m、短径約2.5mの略々楕形を呈す落ち込みが認められた。本ビットの直上には約20cm前後大の礫が数個おかれているような状況にみうけられ、期待されたのであるが、調査の結果、掘り込みは一定ではなく、底面は北方から南方に向って傾斜しており、内部には多くの小礫と数片の弥生式土器、中世の土器が含まれていた。その性格については不明であるが、ごく近年、掘り込まれた穴ではないかと思われた。出土遺物は、第3区の南端よりもっとも多く、押型文土器、条痕文土器、そのほかに石錆、スクレイバーなどの遺物が検出された。

J-1区では、復原可能な土師器の壺および高杯の脚部がみいだされたが、遺構は検出されなかつた。

K区では、6・7区にかけて径65cmの円形を呈すビットがあきらかにされた。ビットの深さは約15cmと浅く、内部には土師器・土師質土器の小破片が数点とかなりの量の炭化物が含まれていた。また、5~10cmの小礫も多く含入されていたが、J-2・3区のビットと同様に不明である。遺物は、第2区において無文厚手土器、条痕文土器が数点出土したのみである。

本遺跡の西端にあたるL区では、遺構を検出することはできなかったが、縄文早期の遺物が多量にみいだされた。第1区では押型文土器、無文厚手土器が数点で少ないが、第2区では押型文土器、無文厚手土器、条痕文土器と多く、それに滑石製有孔円板が1点出土した。第3区では押型文土器、条痕文土器、石鏃、スクレイバーなどがあり、特に石器の出土が著しい。

L区では、第1区において梢円形のピットが4個発見された。いずれも5~8cmをはかる非常に浅いピットで、内部には遺物等の包含がまったく認められず、その性格についてはあきらかでない。遺物は、第1区において梢円押型文土器が、また、第2区では、ほぼ完全な男瓦がみいだされた。このことは建築跡との関係で十分留意する必要があろう。

第1トレンチでも、J・K・L区と同様に、縄文早期の遺物が多く出土した。遺物の出土は南端よりが特に多く検出された。

全般に縄文早期の遺物は、J、K、L区—3・4区とF—3区、G—4区、H—5区、I—6区で多く出土しており、その状態は、定位置的な存在を示すものではなく、二次的な堆積状態を呈しているのではないかと考えられるものであった。

(是光吉基)

VII. 遺構

建築跡遺構(図版5・6、第6・7図)

本建築跡は、すでに前記したようにE-3・4・5区、F-1・2・3・4・5区、G-1・2・3・4・5・6区、H-1・2・3区、h-1区にかけて検出されたが、表土から約40cmの深さに本遺構が存在していたために、かなり搅乱されており、特にD区より東側では、ほとんどみとめられなかった。

遺構は、E-4・5区、F-5区、G-1・2・3・4・5区が特に良好に遺存しており、E-4・5区にかけては基壇の地覆石があきらかにされた。西北西から東南東を軸とする方向では、約50~60cm前後をはかる礫の面を南北两侧にそろえており、現存長約4.7mをはかる。また、それと西北西隅を形づくっている比較的小さい礫の地覆石列が南北から北東軸にあり、石の面を北西側にそろえている。しかし、残存しているのは西北西の隅から約1.5mまでで、それ以北ではまったく存在していなかった。南東においても宅地造成によって削平されているために詳かでないが、約80cmをはかる礫があり、他の石にくらべて大きく、また、礫のあり方を考慮してみれば、それを地覆石の一部であると想定することができ、復原計測をするならば、南辺は約5.8mとなるであろう。しかし、他辺では破綻度が大きいためあきらかにしがたい。

また、この南辺の地覆石に接して、比較的狭小な礫を使用した石列が確認された。西北西から東南東に軸をとる方向では、約1.8mをはかり、この部分の石列は北東側に面をそろえており、西北西隅は良好に遺存しているが、東南東の隅はあきらかではない。

西北西隅から約2.3m南北西によりには1m大の比較的平坦な礫が存在し、そこから南東約1.6mのところには60cm大の礫が、さらに1.5m南北西よりも同様な約70cmの石が認められた。これらの石は並列的におかれているようにみうけられ、礫石ではないかと考えられるが、南北西の石列および西北西の状態を考慮したときに若干の疑点がないでもない。

東南東から西北西にのびる地覆石より南西約5.7mのところには、巾1.7mの石疊状を呈している列が明らかにされ、礫石および石列の北西をむすぶ線上に、この列の北東隅が存在している。現存長約3.5mで、北東側では10ないし30cm前後の礫を2ないし3段の小口積にしているのに対し、南西側では70cm大の礫の縦面をそろえているが、高低差においては两者とも一定の状態にある。さらに、西北西への延長線上14.5mにおいても、これに統くと考えられる石列が認められた。面を北東に合せているが、南西側では良好でなく、西北西約9mにおける石の状



第6図 建築跡遺構実測図 (1)

態からそれを想定することができるが、他の部分では存在を認めることができなかつた。また、北東列の4.5mのところにおいて、北々東にのびる長さ1.3mの石列が検出された。しかし、これが西北西の隅を形づくるものではなく、南東側ではそれより西北西約2.7mまで本石列が続き、南西側の配置状態を考えれば、その距離は約23.5m前後となるが、それは、北々西にのびる可能性が十分に存在している。（第6図）

本遺構のうち、H—1・2区、h—1区、G—2・3・4区にかけては、多量の小礫がみとめられる。しかしながら、それは全面にわたって存在しているのではなく、一定の規律をもつていて、特にその状態は石列と同方向に存在しており、石列の面がそろった内側には部分的にしかなく、あきらかに本遺構と有機的な関係を有しているということができよう。さらに、1mを前後する礫が散在しているが、これはあきらかに自然石である。

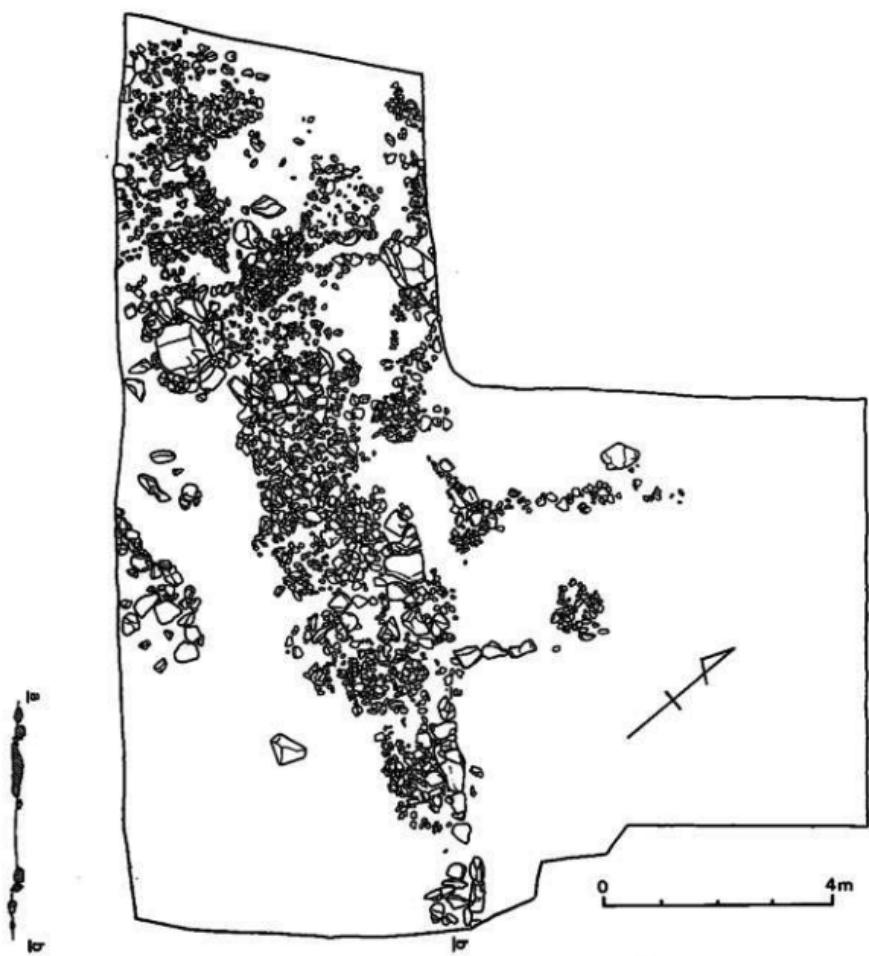
一方、東南東から西北西方向にのびる地覆石とその西南西の石列との間には、長さ1.4m、巾1mのまとまりをもつ礫が存在している。上面を水平位にそろえており、北東の地覆石および南々西のそれとの高低差をみれば、地覆石よりもやや高く、南々西の列と同等位である。また、上面には焼土および炭化物が2~3cm程度の厚さで認められた。

B—2区における石列は、南西から北東軸方向に存在しており、北東隅を形成している。使用された石は、非常に扁平で、30ないし45cm前後をはかるもので、褐色土層を基盤として構築している。面は北西側および北東にそろえているが、その遺存状態は良好でなく、南西から北東軸には約1m、北西から南東軸方向には1個の石で約30cmとわずかである。本列は、G—2区で検出された北々東にのびる長さ1.3mの石列とは統かず、そのために別の建造物を想定しなければならない。（第7図）

C—2区であきらかにされた遺構は、径1m前後の略々円形を呈すように配された礫群とピットで、礫群は15ないし30cm前後の礫を表層下約40cmの褐色土層を基盤として、主体的に配置し、それに4~10cmの小礫を補填している。本遺構は、F—5区でみいだされたそれと同様な状態に存在しているが、規模はやや小さく、また、上面は不揃いである。礫群の南西約80cmのところには、径34cmのピットがあり、それは褐色土層から切り込んでいる。深さは35cmをはかり、その断面は袋状に近い形態をなしている。

本遺構の主軸は、磁北より148度、真北より141度90分東に偏しており、建築に際して磁北にあわせているのではなく、地形上の制約をうけて建立されたようである。

以上のように、遺構間の関連性については、かなり不明瞭な点が多く存在しているが、その配置状態から、一応地覆石が存在しているところを門跡および南西における石列を築地跡として想定することができよう。ただ、本遺構に伴なってみいだされている小礫が、いかなる部分



第7図 建築跡遺構実測図 (2)

を構成するのか、さらに、円形状を呈すように配されている礎の性格についてはあきらかにしがたい。

本遺構の時期については極めてあきらかにすべき資料はないが、出土遺物からあえて推定するならば、瓦類は瓦当面の文様構成から2種類に分類され、それは変形渦文と巴文であり、前者は鎌倉期、後者は室町期に比定することができよう。また、石列の間からは鎌倉期の遺物がかなり多く、さらに室町期に比定される備前焼の太甕の口縁部が検出されたことは、円明寺創建時期あるいはその存続時期等について一つの示唆を与えるものであろう。

(是光吉基)

VII. 遺物

a. 織文式土器 (図版7・8a、第8・9図)

本遺跡出土の織文式土器には、押型文土器、無文厚手土器、条痕文土器、その他、織文後期土器、織文晚期土器が出土したが、いずれも小破片が多く全体量は非常に少ない。量的には押型文土器が最も多く73点で全体の約46%を占め（そのうち山形押型文28片、橢円押型文43片）、ついで条痕文土器59点（約38%）、無文厚手土器23点（約15%）の順となっている（第2表）。

また附近の宅地造成や畠の耕作等によりかなり攪乱されているよう、層序的にあきらかでなく、そのため、押型文土器、無文厚手土器、条痕文土器の時期的な把握はできなかった。しかし、土器の文様の上からつぎの4つのグループに区分することができよう。

山形押型文土器

黄褐色を呈し、器厚0.4~0.7cmをはかる極めてもらい土器で胎土には石英、長石等の砂粒を含んでいる。土器は山形の形によりつぎの3つに大別される（1~9）。

- (1) 山形の1個の幅がその高さに比して幅広く、全体に山形が緩やかなもの（1・2）であり、なかにはその幅が著しく長いために直線に近いもの（1）もみられる。
- (2) 山形の1個の幅がその高さに比して余り大差のないもの（3~8）で、施文具の文様の形の間隔が幅広いために施文された山形の縫文の間が著しく狭くなっているもの（8）もある。
- (3) 山形の1個の幅がその高さに比して狭いもので、全体的に山形がシャープなもの（9）である。

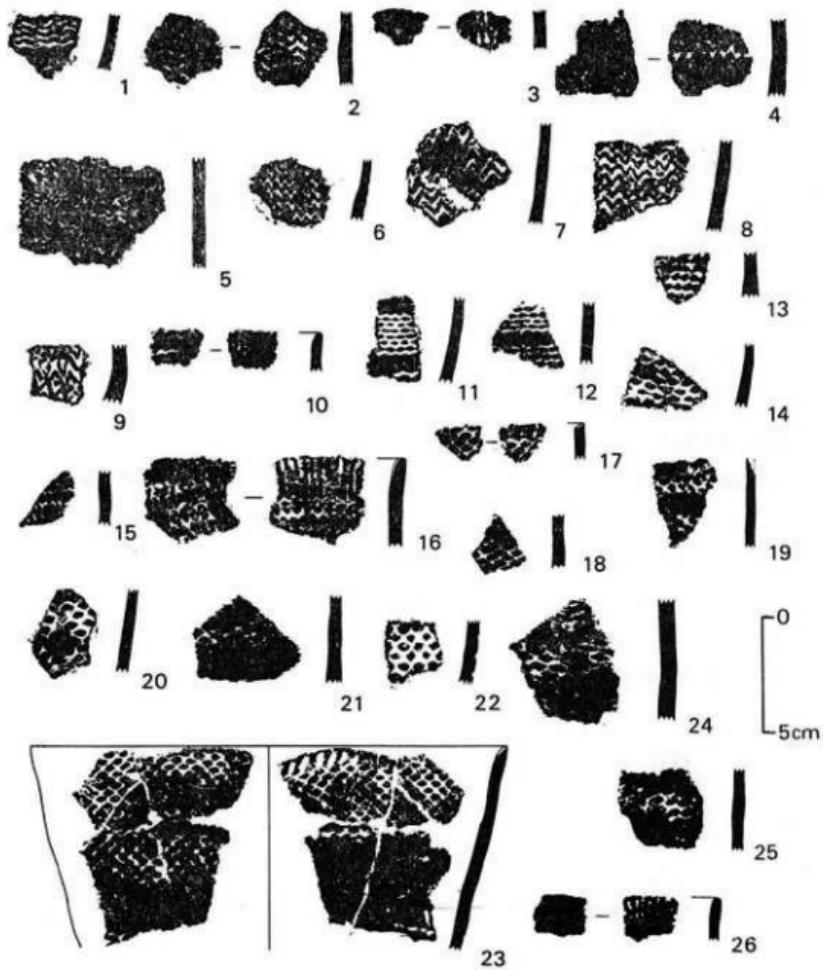
以上はいづれも少量の破片であるために量的には著しい差はみられない。また（3）は口縁近くであろうが、裏面の口縁上端には直角に施文原体による擦過の跡が察える。

文様は横位に施し、裏面にも同じ文様がめぐらされている（2・4）が、破片が断片であるため口縁部から底部までどのように施文されたものかはあきらかでないし、裏面も同様である。しかし（1）にみるように外表面に巾0.7cmの無文帶を残しているものもある。

橢円押型文土器

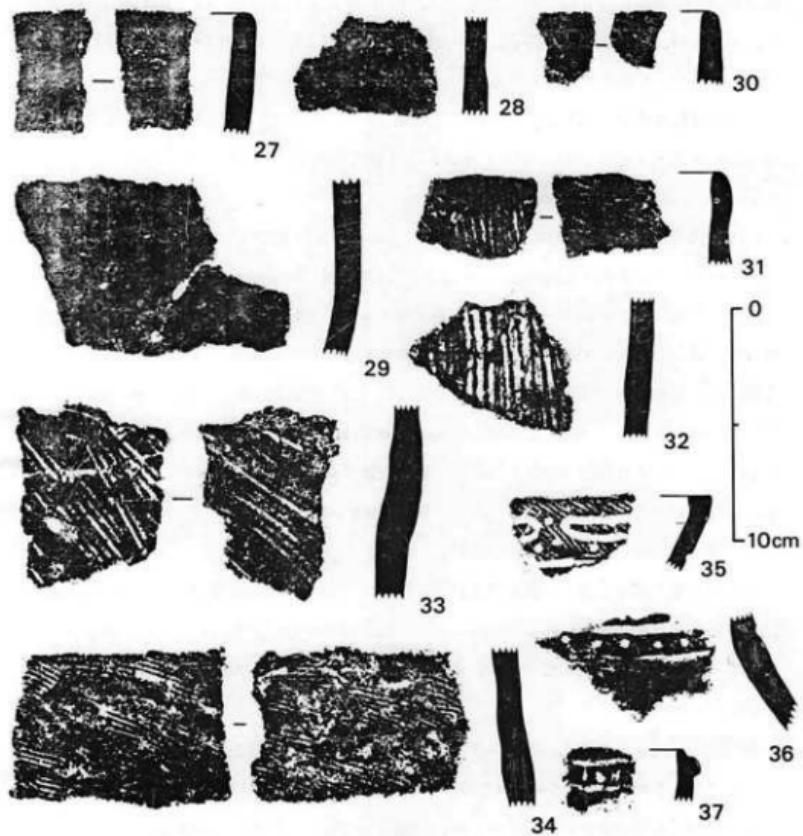
黄褐色を呈し器厚0.4~0.7cmをはかる焼成の悪い土器で、胎土に石英等の砂粒を含んでいるものが多いが、含んでないものもあり、それは器厚が薄い。土器は文様により3つに大別される（10~25）。

- (1) 山形文と橢円文とをミックスしたような形で、一見連珠のように見えるものである。施文



第8図 繩文式土器拓影（1）

方法の違いによって、表面上長軸を横位置に連結したものと、短軸を横位置に連結したものがみられる（10～16）。（11）は長軸4mm、短軸が1.5～2mmの楕円粒子をもち長軸を横位置に連結し、施文原体1本（原体は長さ1.8cmをはかる）によって横に施文され、その上下に無文帶（幅0.7cm）を残している。



第9図 縄文式土器拓影 (2)

(12) は (11) と同様の粒子をもち、幅4.5mmの無文帯を残している。(13) は長軸4~4.5mm、短軸2.5~3mmの梢円粒子である。(15) は短軸を横位置に連結したもので、長軸5.5mm、短軸2.5~3mmで施文原体を縦に転がしている。(16) は口縁部であり、長軸7~8mm、短軸3.5~4mmの粒子で短軸を横位置に連結したものを表裏に施文し、施文原体を縦に転がしたものである。口縁はやや外反する程度で口縁内面には幅1.5~2.5mmの施文原体による擦過の跡が、口縁上端から1.8cm幅で直角にみられる。

(10) も口縁部であり、やや外反する器形で、表は長軸4mm、短軸2.5~3mmの梢円粒子の長

軸を横位置に連結したもので口縁上端から1cm巾は無文部を残している。裏は同じ文様でなく、長軸4mm、短軸2mmの斜格子に近い文様を配し、幅1mm、長さ0.7~1.2cmの平行短縫が口縁上端に向って直角に走っている。

(14) は長軸を横位置に配しているが、連結部分がくっついているものと、若干はなれているものとが同一文様の中でみられ、連結する文様に準ずるものであろう。梢円粒子は長軸5.5~6mm、短軸2.5~3mmをはかる。

(2) 梢円の粒子が菱形で、全体としてネガティブな格子目に近いものである。梢円粒子には大、小があるが、長軸と短軸の差があるものと、ほぼ等しいものとがみられる。(17~23)

(21) は長軸7mm、短軸5~6mmであり無文部をもつ。(17) は口縁部であり長軸6mm、短軸4mmで表裏とも同じ文様が施され、口唇部に幅約1mmの平行短縫が入っている。(18) は長軸5mm、短軸3mmの粒子をもち無文部をもつ。(19) は長軸4mm、短軸3.5mmで幅0.7cmの無文帶を表している。(22) は長軸と短軸が5mmではほぼ同じぐらいであり、円形に近いものである。(23) は口径28cmをはかる直口縁の土器で長軸5mm、短軸4mmの梢円を表裏に配し、表は口縁上端から一施文原体(原体は長さ2.9cmである)の帯と、それに続き0.7cmの無文帯を設け、また一施文原体の帯を接着している。

真も同じ施文原体を使い一施文原体の帯を配している。口唇部は幅2.5~3mmの深く掘り込んだ短縫を口縁上端から約3mmのところまで斜位に施されている。色は内、外表面は黄褐色であるが、器壁内は黒褐色を呈し、胎土にはあまり砂粒を含んでいない。外表面には煤が附着している。

(3) 梢円粒子が大きくて荒く、バラつきの多いもの(24~25)である。

(24) は長軸6mm、短軸3.5~4mmで器厚が7mmとやや厚いものである。

(25) は梢円粒子の大きさ長軸6~7mm、短軸3mmである。器厚は5mmある。

以上の押型文土器の他、押型文土器の口縁部と思われるものが1点出土している。(26) 表は無文で、裏は幅1mm、長さ0.8~1.2cmの平行短縫がみられる。

無文厚手土器

暗褐色あるいは黄褐色を呈し、石英や長石、金雲母等の砂粒を多く混入した焼成の悪い土器である。外表面には煤が附着し、内外とも手づくねのため指で押した痕が著しく、器厚は厚く0.8~1.5cmをはかる。(27~29)

口縁部は2点出土しているが、直口のもの(27)と口縁部近くになって急に外側に反りをもつものとがあり、胸部の推定復原図は(29)からすると34.4cmをはかる。

(29) は器厚10~13mmをはかり、外表面は黄褐色、内表面は暗褐色をしており器壁内は外表

面から約3mmが黄褐色、それ以外は暗褐色をしている。胎土には石英、長石、金雲母等の砂粒が多く混入され焼成は悪い。外表面は煤が附着しており、内、外表面とも手づくねの痕がみられるが、特に内側は著しく凹凸が激しい。焼成も外の方が良いようであり、外側が火にあてられたので焼きしめられ、また液体状のものが入れられたために、内側の焼成が悪く、ろくに磨滅しているものであろうか。

条痕文土器

暗褐色あるいは黄褐色を呈し、器盤は厚く口縁部附近で8~10mm、胴部附近で10~16mmをはかり、胎土には石英や長石等の砂粒を混入している(30~34)。

外表面には煤が附着しているものがあり、ほとんどが無文厚手土器と同じく焼きしめられたものであろうか、外側の方が内側よりも少々堅くなっている。推定復原径は(34)が胴部で30.6cmをはかり、他に31.4cmのものがある。

条痕は表裏とも横位または斜位に施されており、表裏とも口縁部近くまでほどこされているとおもわれる。また条痕は、施文具(二枚貝)の違いによるものであろうか、条痕の巾の広いもの(33)と狭く細いもの(34)の2種がみられる。

(30)と(31)は口縁部であるが、いずれも直口した口縁部であり、口唇部は内側から外側に向けてやや丸味を帯びている。

施文具の条痕の数は、6本が1組のもの(33)と7本が1組のもの(34)がみられる。

(33)は器厚9~15mmをはかり全体的に暗褐色を呈しているが外より内表面の方が若干黒味を帯びている。手づくねのため表裏とも凹凸が激しい。条痕は表裏とも斜位に施され、巾0.2cmの条痕を6条を1組として配している。

(34)は器厚11.0~13.0mmをはかり外表面は黄褐色、内表面は暗褐色を呈し、器盤内は外表面から0.2cmまでは内表面と同じ色調をしている。条痕は表裏とも同じ施文具で成され、巾0.1cmの条痕を7条を1組として斜位に配している。

(30)は口縁部であるが、色調は表裏とも黄褐色であり器盤内は暗褐色をしている。器厚は0.8~1.0cmで、条痕は表は横位、裏が斜位で、条痕の中には0.2cmである。外表面は若干煤が附着している。口縁部は内から外にゆるやかに丸味をもっている。

その他、条痕文土器には、以上の例とは異なり、若干焼成の良い器厚の薄い土器片が一片出土している。前期前半のものとおもわれる。

器厚0.6~0.8cmをはかり表裏とも黒味がかかった黄褐色を呈し、胎土に石英や長石、金雲母等の砂粒を混入しているが、焼きは堅緻で、外表面には若干煤が附着している。条痕は表裏とも斜位に施され、巾0.2cmで5本が1組となっている。

区	押型文土器			無文厚手 土器	条痕文 土器	縄文後期 土器	縄文晚期 土器	計
	山形文	梢円文	不明					
I-1		1						1
k-2		1						1
L-1	2	2		2	1			7
G-2								
H-2		1						1
I-2					1			1
K-2		1	1	3	3			8
L-2	1	3		2	6			12
E-3		2				1		3
H-3	1	1						2
I-3		1						1
J-3	9	13	1	8	21			52
L-3	1	2			3			6
B-4	1	1						2
F-4	1					1		1
H-4	2			2	3			7
G-5								1
H-5		6			2			8
I-5					2			2
I-6	6	4		6	14			30
I-7	2	2			3		1	8
不明	2	2						4
計	28	43	2	23	59	2	1	158
		73						

第2表 縄文式土器区別出土表

その他の土器

以上の他、縄文後期前半の中津式に相当すると思われる土器2点(35・36)と、縄文晚期の黒土B II式に相当する土器(37)とが出土している。

(35)は口縁部で、縄文地に幅0.3cmの沈線をめぐらして地文を磨消し、その間に径0.2~0.3cmの刺突がみられる。口唇部は平らで口縁内面は内側に湾曲している。色調は赤茶とも黄

褐色で、器壁内は黒褐色をしている。

(36) は (35) の土器と文様構成が同じで、胎土、色調も同じである。

(37) は晩期後半の黒土B II式土器で、口縁近くに突帯をもち、その上に割み目を配している。黄褐色を呈し、砂粒を混入している。

以上、縄文式土器について、その時期、文様の相違によって述べてきた。縄文式土器のうち、前期のものが1、後期2、晩期1で、ほとんどが早期のものであった。また早期のものでも総数が158点で非常に少なく小破片で、条痕文土器と横円押型文土器が若干多いようであるが、個別にみるとあきらかでなく、その相対的な数から考えることはできない。文様別による出土状況を示すことにとどめた。

(中田 昭)

b 石 器 (図版8 b・9 a、第10・11図)

当遺跡より出土した石器の量は少なく、わずかに尖頭器・石錐・スクレイバー・石錐・磨石および擦痕のある石・滑石製有孔円板が表採あるいは発掘調査によって検出された。ここでは、縄文時代の遺物と考えられる前者について記述しておきたい。

1 尖頭器 (第10図1)

観音小学校生徒によって表採された資料で、全長6cm、尖頭部より4.6cmが最大で幅2.4cm、最大厚0.9cm、舌部の長さ1.4cmをはかる。整形は、両面ともに念入りな調整剝離がなされており、両端とも鋭利に尖っている。また、両側縁は直線的でなく、全体に丸みをもっている。ここでもっとも留意されるのは、整形手法にあたって斜の押圧剝離を行なっていることであり、それは、左から右、基部→尖頭方向に行なわれている。さらに縁辺部には細加工がなされている。

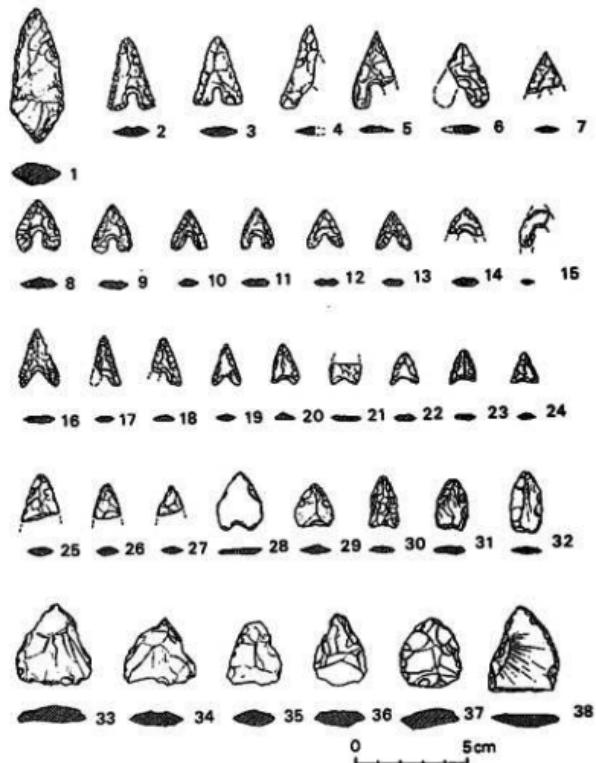
2 石 錐

出土石器のうちでもっとも多く、37点をかぞえることができ、それはおおまかに基部のえぐり込みの有無および調整の状態から、(1)基部にえぐりがあり、調整剝離が比較的良好なもの(2~32)、(2)比較的大形で、調整がやや荒いもの(33~30)とにわけられよう。さらに、(1)はその形態から、(a)長二等辺三角形を呈しているもの、(b)二等辺三角形に近い形態をなすが、わずかながら内曲傾向の耳をもつていてるもの、(c)略々正三角形に近い形態をなしていいるもの、(d)五角形を呈するものとに分類される。

(a) これに該当するものは2~4、16~20で2、3は、縁辺部に念入りな鋸歯状の細部加工がなされており、基部はえぐりが深くて丸みをもつていている。また、その部分は、ほぼ直角に穿っているのに対し、4、16~20の基部のえぐりは鋭角に穿たれており、4は、耳の部分がや

や外反する。断面形は両面が平坦で、いずれも類似した手法がみられる。石質は角閃石などを含む安山岩である。

- (b) やや大型の石鎌（5～8、14、15）と小形（9～11）のものがある。えぐりの部分は、いずれも丸みをもち深めである。調整剝離は良くなされており、縁辺部は鋭利である。石質は、5～11、14が安山岩で、15は、やや質のおとる黒曜石である。
- (c) えぐり込みが深くて、丸みをもち調整が良好なもの（12、13）と、その部分が浅くて鋭角に穿たれ、比較的粗製（22～24）なものがある。石質は、いずれも安山岩である。
- (d) やや丸みが強く、剥片を利用してわずかに調整剝離をしているもの（28、29）と細長くて鋭利な感じのする石鎌（30～32）とがあり、特に後者は、縄文後期に多くみとめられる石鎌である。石質は、角閃石などを含む安山岩である。



第10図 尖頭器・石鎌実測図

その他、基部が欠失しているために明らかでない3点のものがあり、25は尖頭器ではないかと思われるが詳かでない。26は石英製で良く調整されている。

(2)に属するものには、比較的正三角形に近い形態を呈しているもの(33, 34)と長二等辺三角形に近いもの(35, 36, 38)および二等辺三角形に近くて縁辺部がやや丸みをもつもの(37)の3通りがみとめられ、全般に調整剝離はあるめである。また、このうち33, 34, 37, 38は槍先として使用されうるもので、特に38には小さな調整剝離が顕著である。石質は、36が石英であるほかは角閃石などを含む安山岩である。

3 スクレイパー (第11図1~18)

スクレイパーは、不定形を呈しているもの(1~16)といわゆる石匙(17・18)の2通りがある。不定形を呈すものは、さらに、(a)、サム・スクレイパーと考えられるもの(1~5)、(b)、ラウンド・スクレイパー(6)、(c)、サイド・スクレイパー(7~16)の3種に分類される。

(a)、楔形のフレイクの側縁を三方向に調整剝離を行なっているもので、1~3は階段状の剥離がなされており、いずれも平坦な打面をそのまま残している。4・5の上端部には、打面、打瘤痕が残っており、側縁には一方からの細かな調整剝離がなされている。

(b)、6はフレイクの中心部を残して、全側縁に両側から細かな剥離を行なって刃部を整えていたため銳利である。また、打面は調整によって剝取されている。

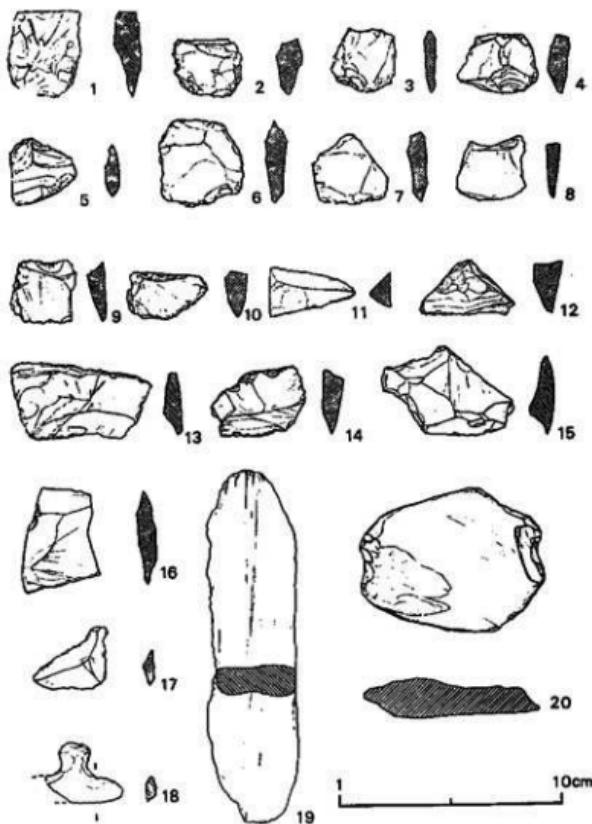
(c)、縦長のフレイクを利用して、この側縁の長辺部分に細かな調整剝離をしている。7~9は、打面をそのまま残し、フレイクの一方を1ないし3回の剝取を行なって截断している。10~14は、2辺に平坦な打面(10・11・14)あるいは自然面(12・13)をそのまま残しているもので、刃部の加算はほぼ直角に近い細かな調整が両側よりなされている。15は、横長のフレイクを調整剝離して、刃部を整形しているもので、平坦な打面をそのまま残し、右側は上端および下端から2回の剝取を加えて截断している。刃部は、両面から細かな調整しており、非常に銳利である。

石匙は、いずれも横形で、摘みをやや斜にもつものとほぼ中央部にもつものとがあり、17は、側縁に細かな調整を行なっている。18は、刃部の一部を欠失しているが、調整是非常にていねいで、刃部は銳利である。

これらの石質は、いずれも角閃石を含む安山岩である。

4 磨 石 (第11図19)

棒状を呈しているもので、表面はかなり磨滅し、中央より上部にかけてくぼんだ部分がある。それに対し、裏面にはまったく手が加えられておらず、自然面をそのまま残している。石



第11図 石器実測図

質は緑泥片岩である。

5 石 錘（第11図20）

扁平な緑泥片岩の長軸の両端を両方から大きく打ち欠いて刻み目をつけており、かなり大形で、重量 147g をはかる。

（是光吉基）

第3表 石器出土表

	種別	長さ (cm)	巾 (cm)	重量 (g)	材質	出土地点
1	尖石頭 器盤	5.8	2.2	11.5	安山岩	表 採
2	"	1.0	0.8	0.2	"	F-2
3	"	3.2	1.2	1.4	"	F-3 南拠
4	"	2.1	1.2	0.65	"	"
5	"	3.4	2.8	10.6	"	F-5
6	"	2.9	2.9	5.7	"	G-4 西拠
7	"	3.2	2.2	4.75	石安	H-5
8	"	1.1	1.2	0.5	英岩	I-1
9	"	1.6	0.8	0.45	"	J-3
10	"	3.1	1.4	1.6	"	J-3 西拠
11	"	2.4	1.8	1.0	"	J-3 南拠
12	"	1.7	1.2	0.5	"	J-3 西拠
13	"	2.9	1.4	1.8	"	J-3 南拠
14	"	3.4	1.6	1.3	"	J-1
15	"	1.9	1.3	0.9	"	K-1
16	"	0.8	1.3	0.15	"	k-2
17	"	2.4	1.2	0.7	"	L-1
18	"	2.1	0.7	0.3	"	"
19	"	1.7	1.2	0.5	"	L-3 東拠
20	"	1.2	0.9	0.2	"	"
21	"	1.8	1.4	1.05	"	"
22	"	2.0	1.4	0.9	"	"
23	"	1.2	0.9	0.3	"	I-2
24	"	2.3	1.8	1.3	"	I-2
25	"	2.1	1.3	1.2	"	"
26	"	2.8	2.5	6.7	"	表 採
27	"	2.4	1.2	1.2	"	"
28	"	3.7	0.7	1.1	"	"
29	"	3.7	3.0	6.5	"	"
30	"	1.4	1.3	0.6	"	"
31	"	1.8	0.8	0.3	"	"
32	"	1.2	1.0	0.3	"	"
33	"	1.5	1.3	0.6	"	"
34	"	1.3	0.8	0.1	"	"
35	"	2.5	2.4	4.1	"	"
36	"	1.6	0.9	0.25	"	"
37	"	1.6	1.25	0.5	"	"
38	スクレイバー	5.5	2.9	33.4	"	A-4
39	"	4.0	3.8	22.2	"	I-6
40	"	3.8	1.8	7.6	"	"
41	"	4.0	3.0	14.6	"	I-7
43	"	3.5	2.6	7.7	"	J-2
43	"	4.0	2.4	10.9	"	J-3
44	"	2.9	2.6	8.4	"	J-3 西拠
45	"	3.5	2.0	8.4	"	"
46	"	2.8	2.6	8.3	"	L-3
47	"	2.6	2.4	6.7	"	"
48	"	4.0	3.0	20.1	"	L-3 東拠
49	"	2.8	2.2	6.2	"	L-3
50	"	4.0	3.0	12.1	"	"
51	"	3.2	3.0	9.2	"	1-1 西拠
52	"	2.8	2.7	6.9	"	E-3 東拠
53	"	3.1	1.8	3.1	"	L-3 南拠
54	"	3.4	1.2	4.0	"	E-3
55	石磨石	16.5	4.3	179.3	緑泥片岩	H-3
56	"	7.8	6.2	147	"	"

c. 瓦 (図版10・第12、13、14図)

古瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦をはじめ丸瓦、平瓦、鬼瓦等建物造構を中心として数多く出土したが、いずれも破片で完形品はなかった。

軒丸瓦

軒丸瓦はA・Bの2種類に分類できる。

A類は珠文帯変形渦文軒丸瓦である。A1(第12図1・第13図1)は瓦当面上側2分の1程度のものである。内区は起点を上面やや左側に偏した彫りの深い3重の右巻渦文で、渦線は外方に突出するに従い広くなる。この渦文は宝珠を横にしたものとおもわれる。

内区と外区は1本の圓線で隔されている。外区には7個の珠点が確認されるが、復元的考察によれば16個の珠点がめぐるものとおもわれる。外縁はやや幅の広い素縁である。内区については、当初欠けている右下部に、左上のと対称的な渦文をもつものかとおもわれたが左上渦文と圓線との間に渦文が修まらず、下側にはないものと考えられる。このことは後に述べる軒平瓦a類の文様構成からも裏付けられる。

推定径15.8cm、瓦当はやや厚手であるが、胎土、焼成ともに良好である。縫内にはこの種の渦文を使用した軒丸瓦はみられず、地方色に富んだ軒丸瓦といえよう。円明寺の創建に際して使用されたものであろうか。

A2(第12図2)は1と同様珠文帯変形渦文軒丸瓦で、内区の渦文を残す瓦当面3分の1程度のものである。径1.1cmの珠点を5個確認できる。3も渦文がわずかに判別できる小破片で、1と同形式であろう。

B類は珠文帯巴文軒丸瓦で1個体(第12図8・第13図4)が出土した。内区は尾の短い3つ巴文で、内区と外区を隔する圓線もなく、11個の珠点がめぐっている。やや簡略化された文様構成で胎土、焼成もふつうであること等から、退化傾向にあるといえ、A類とは時期的に隔たりがあると考えられる。

軒平瓦

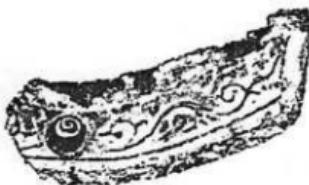
軒平瓦はa・bの2種類に分類できる。

a類は均正唐草文軒平瓦である。a1(第12図5・第13図2)は瓦当面右側5分の3程度のもので、中心飾として軒丸瓦A類と同様の渦文を持ち、中心部より左右に各々3転して伸びる唐草文ほどこしている。外区は無文で、額の深さも普通である。唐草文様はいまだ退化しておらず、中心飾の文様等から考え合わせると、軒丸瓦A類とセット関係を持ち、円明寺創建時に使用されたものと考えられる。



3

1



5

2



6



4



7



8

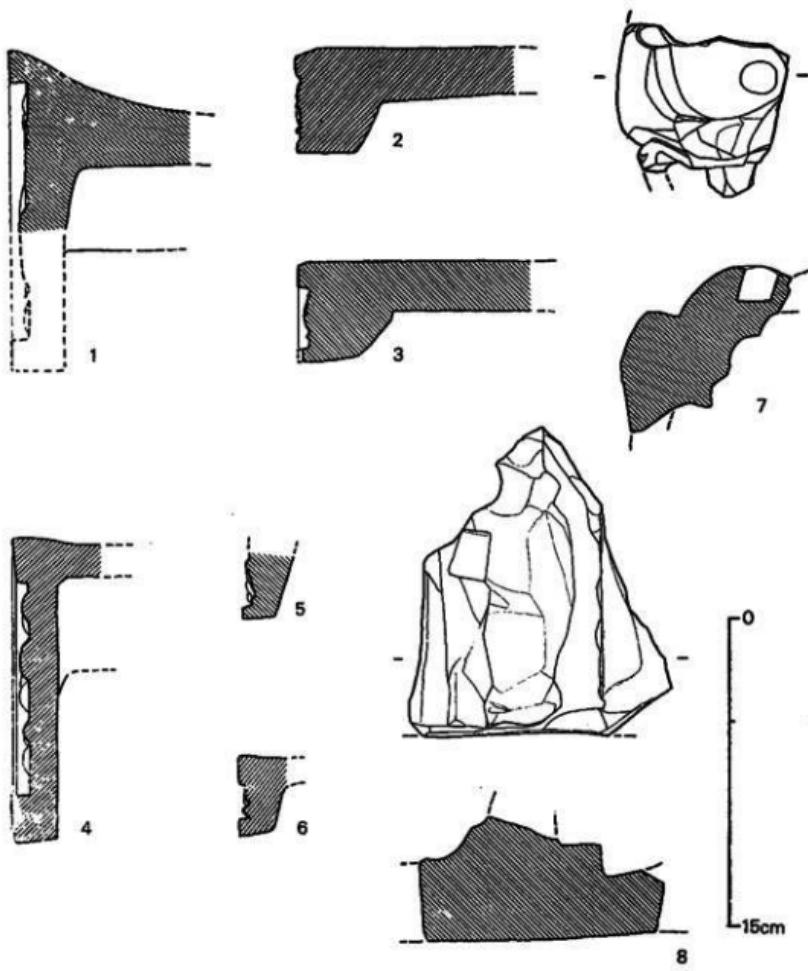


9



10

第12図 軒丸・軒平瓦拓影



第13図 軒丸・軒平瓦断面および鬼瓦実測図

a 2 (第12図 6) は瓦当面右側4分の1の破片である。唐草文様が見えるが、その文様等から5と同形式であろう。a 3 (第12図 4・第13図 3) は瓦当面左側5分の3程度のもので、5と同形式であろう。a 4 (第12図 7) も瓦当面左端部のみの破片である。1と同形式であろう。b類も均正唐草文であるが、中心飾等 a類とは異なる。b 1 (第12図 9・第13図 5) は中

心部のみの破片である。中心飾に隆起の著しい菊水文様を持ち、左側に唐草文様が伸びていくようである。恐らく右側にも同様唐草文が伸びて、均正になると思われるが確証はない。瓦当面の幅は不明であるが、頸は浅く、胎土、焼成もあまりよくない。

b 2 (第12図10・第13図6) も中心部のみであるが、b 1 と同様中心飾に菊水文様を持ち、左右に唐草文様が伸びている。しかし b 1 に比べ、退化現象は著しく、瓦当面の幅も狭い。頸も浅く、胎土、焼成もあまり良くない。

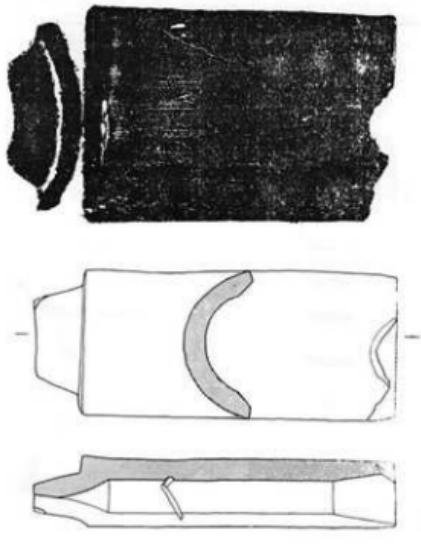
b 類は a 類より時期的にかなり下り、軒丸瓦 B 類とセット関係にあると思われるが、b 1 と b 2 のどちらとセットをなすか不明である。

鬼 瓦 (第13図7・8)

鬼面文鬼瓦で、左側目、頬、口を示す部分と、左下頬に相当する部分の2片が出土した。いずれも小片で全体の規模、文様構成は推定の域を出ないが、大きく口を開け、牙を剥き出し、忿怒の形相を示すものとおもわれる。外帶は1重の圓線がめぐり、胎土、焼成とも良好である。

九 瓦 (第14図)

完形品である。玉縁のついた全長40cm、幅18cm、玉縁長5cmのものである。外面全面に櫛目叩きを施していたようであるが、ヘラで削って消している。内面には荒い布目が残っている。胎土、焼成とも良好である。



第14図 九 瓦 実測図

0 10mm

第4表 軒九瓦分類表

単位 cm

形式番号 (四面番号)	瓦当面										全長	玉縁長	個体数	
	直徑	内区			外区				内縁幅	外縁幅	内縁文様	外縁文様		
		内区幅	内区高	内区文様	外区広	内縁接	外縁接	内縁高						
A (第12図1~3)	15.8	7.6	0.3	満文	3.7	2.1	珠文16	1.6	0.8	無文	不明	不明	3	
B (第12図8)	15.0	5.2	0.5	3つ巴文	4.9	2.4	珠文11	2.5	0.8	無文	不明	不明	1	

(直徑、珠文数は復元推定)

第5表 軒平瓦分類表

単位 cm

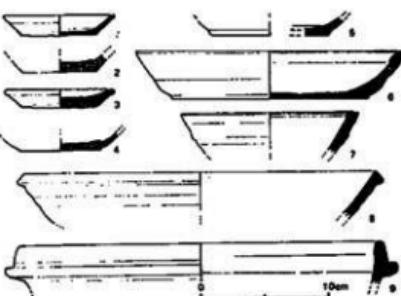
形式番号 (四面番号)	瓦当面										額深	全長	個体数	
	上弦幅	下弦幅	内区厚	中心箇	内区文様	上外区厚	上外区文様	下外区厚	下外区文様	脇幅				
a (第12図4~7)	22.5	4.5	22.0	2.4	満文	均正	1.0無文	1.2無文	1.1無文	0.2	3.0	不明	5	
b ¹ (第12図9)	不明	不明	不明	2.6	着文	〃	不明	〃	0.6	〃	不明	0.5	1.6	1
b ² (第12図10)	〃	〃	〃	1.5	〃	〃	1.0	〃	0.9	〃	〃	0.4	1.7	1

(上弦幅、下弦幅、弧深は復元推定)

d その他の遺物

土師質土器(第15図)

燈明皿をはじめ、塊、皿、鉢など寺院と関連をもつとおもわれるものであり、石組造構上面から多く出土した。燈明皿、塊の底部は糸切り痕が顯著である。色は黄色を帯びた褐色で、焼成はあまりよくない。1.は燈明皿で、口径 8.7cm、外面には口唇より下部にかけて、幅 0.7cm の間に朱を塗っている。2.も燈明皿の完形品で、口径 8.3cm、器高 1.4cm である。これら燈明皿には、内面外面ともに煤が付着している。4.は底部のみであるが、底部が厚く



第15図 土師質土器実測図

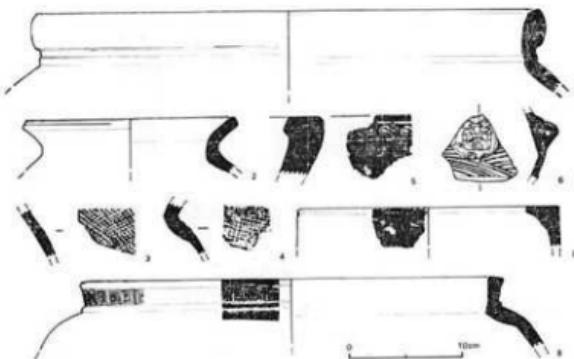
で、2mmの高台がついたような形である。5.も4.と同じく塊の底部のみである。6.は皿で、口径21cm、器高3.7cm、内面外面ともに刷毛で調整し、外面にはところどころ煤が付着しており、口唇部は肥厚している。7.は口縁部の立上がり具合より鉢とおもわれる。推定口径13.6cmで、外面には刷毛の調整痕があり、器表面にはろくろによる水ひき痕が顕著である。口縁部上がややくぼんでおり、口唇部は内側へわずかにはり出している。8.は土鍋で推定口径27.2cm、内側には櫛書き文様がかすかに認められる。9.は土釜で、推定口径が28.0cmある。口縁上端より1.5cm下に鉗があるが、鉗は幅が狭く、内面には刷毛の調整痕があり、外面は煤で黒くなっている。

陶器類(第16図)

備前焼(第16図1)一備前焼太甕で、口縁部のみの破片である。玉縁はゆるやかに湾曲して長くたれ下がっている。頭部に2本の沈線を入れ、肩部にはごま釉がかかっている。色は茶褐色で、焼成も堅緻であり、室町期のものとおもわれる。

亀山焼(第16図2)一亀山焼の壺で推定口径18.3cmである。肩から胴にかけては、器表面が剥離している。3・4とともに亀山焼の壺と考えられるものである。肩部に格子の印き文が顕著にみられる。色は黝黑色を呈し、焼成胎土とともにやや不良である。

瓦質土器(第16図5)一火舎の口縁部である。小片のため口径は不明であるが、器厚は2.7cmを測り厚い。外面口縁近くには、2本の沈線がめぐらされ、その間に「の」状の押型文様が連続してめぐるようである。7は口縁がほぼ直立する火舎である。外面口縁近くに2本の



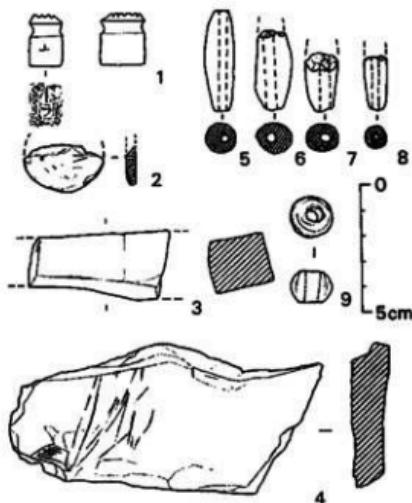
第16図 陶器・瓦質土器実測図

沈線があり、その下に梅花を模したとおもわれる押型がある。外面は赤褐色を呈し、光沢を帶びているが、内面は煤が付着している。

6は火舎の獣面把手の部分である。目・鼻・口を造形して貼りつけている。口とおもわれる部分には鏽を通す透し孔があり、色は黝黑色で、胎土、焼成とも良好である。底部には3本の獣脚がついていたと推測される。8は蓋の口縁部であるが、推定口径35.0cm、頭部には角形渦文が連続してめぐっている。外面は黒色であるが、内面は灰白色で、胎土、焼成ともに良好である。肩はかなり張っている。

石製品・土製品

印判（第17図1）一滑石製で、印面は長方形を呈し、 $1.3\text{cm} \times 1.6\text{cm}$ で縱長に使用したとおもわれる。縦面には「上」の字を刻み、上部であることを示している。印字は片假名で「□ラ」と読めるが、□の字は判読できない。時代も不明である。



第17図 石製品・土製品実測図

有孔円板（第17図2）一滑石製で、2分の1程度残っていたものである。径 3.1cm 、厚さ 0.4cm 孔は2個あり、孔径は 0.15cm である。色は淡緑色を呈している。

砥石（第17図3）一4面すべて使用した痕があり、金属利器の研磨に使用したものらしく、よく磨減している。

丸玉（第17図9）一ガラス玉であるが2次的な火を受けたものらしく、色も光沢を失っ

て灰白色を呈している。径1.6cm、孔径0.5cmである。

その他4のよう、綠泥片岩で擦痕があるものがあり、石などを研磨したとおもわれる。

土 鍋 (第17図5~8) 一いすれも胴の張った円筒状の小型のものである。

第6表 土 锅 一 覧 表

図番号	形 状	規 模	全 長	最 大 径	孔 径	重 量	色
第17図5	円筒状	完 形	4.0cm	1.3cm	0.3cm	5.0g	赤褐色
第17図6	円筒状	ほぼ完形	不明	1.4	0.4	4.5	黄褐色
第17図7	円筒状	半 分	不明	1.3	0.4	3.0	黄褐色
第17図8	円筒状	半 分	不明	0.8	0.2	1.3	黒褐色

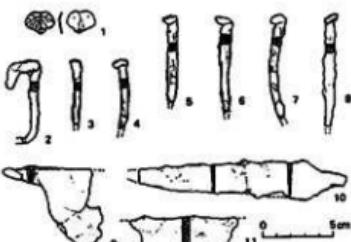
鉄製品・鎌製品 (第18図)

青銅製飾り金具 (第18図1) 一桐葉を模しており、裏側には固定させるために、鉄状の3本の突起がある。

鉄釘 (第18図2~8) 一小型の角釘で、全長のはっきりするものはない。建築に使用したとおもわれる。

包丁型鉄製品 (第18図9) 一柄の部分で、断面形は三角形を呈している。

刀 子 (第18図10・11) 一10は先端部欠損のため全長は不明である。断面は三角形で刃がついている。桿幅は3mmあり、平造りである。



第18図 鉄器類実測図

弥生式土器 (図版12b・第19図)

4点認めることができたが、いすれも弥生時代後期終末にあたると考えられるものである。

出土地点は全域にわたっていた。1は高杯の杯部のみで、推定口径16.6cm、赤味を帯び全面刷毛で調整している。2は高杯の脚部とおもわれる。推定脚径13.0cm黄褐色を呈し、全面刷毛で調整している。むしろ古式土器とした方がよいもの



第19図 弥生式土器実測図

である。3は壺形土器の底部とおもわれる。底径5.8cm、赤褐色を呈して平底である。4も壺形土器底部とおもわれる。底径7.0cm、赤褐色を呈して平底である。

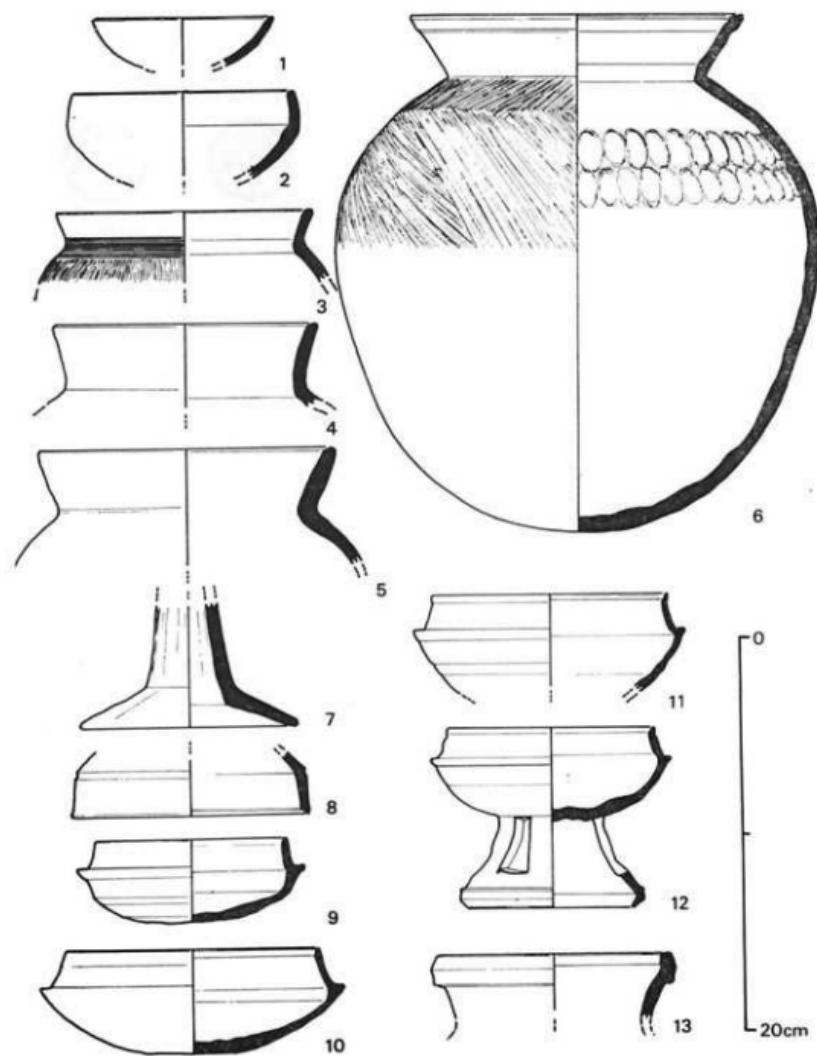
土 師 器（第20図1～7）

出土した土師器のうち6のみがほぼ完形で、その他は破片である。1は壺の口縁部で、口径9.3cm、外面を刷毛で調整している。色は赤みを帯びた褐色で、外面内面とも黒い煤が付着している。胎土は荒く、焼成も普通である。2は壺口縁部で、口径が11.3cmある。口縁部は内曲し、器厚は5mmを測る。外面は刷毛で調整しているが、黒い煤が付着している。赤みを帯びた褐色で、胎土、焼成とも弱い。3は壺形土器口縁部で、口径13.0cm、頸径12.2cm、外面内面ともに刷毛で調整しているが、とくに外面は顕著である。頸部は横なでにし、肩部より下にかけでは縱になでている。4も壺形土器口縁部で、推定口径13.4cm、頸径12.4cmの薄手の土器である。頸より上は縦ぎ足しており、内側につぎ目の段がみられる。5も壺形土器口縁部で、推定口径15.4cm、頸径13.3cmでやや厚手のものである。7は高壺の脚部で、底径11.0cmで、下より1cm上部で急に折れ、脚部をつくっている。外面を刷毛で調整し、黄褐色を呈しており、胎土、焼成ともよくない。

6は壺で、ほぼ完形に近いものである。口径17.0cm、頸径13.2cm、器高26.5cm、最大径は口縁より10cm下のところにあり、24.8cmをはかる。肩がかなり張って、底は丸底である。口縁部はやや外反し、口唇部にはわずかのくぼみをもたせている。外面は刷毛で丁寧に調整し、煮焚に使用したものか、胴より下は煤が付着している。また器表面がところどころ剥離している。内面は肩の辺りから底部に到るまで全面に指頭圧痕の凹凸がある。頸部には縦ぎ足した痕がみられる。色は赤褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。口縁部の広がりなどからみて、前記の3・4・5と同じ時期に属するとおもわれる。

須 惠 器（第20図8～13）

土師器同様調査区全域から数点出土した。いずれも破片となって出土したが、10の身坏と12の高壺は復元可能なものである。いずれも焼成が堅微で、青灰色を呈している。壺や高壺では、口縁部の立上がりが垂直に近く、高いことが特徴で、比較的古い様相を示している。8は壺蓋で、推定口径12.2cm、肩部に太い沈線を入れ、口唇部は2段づくりになっている。9は壺身で、推定口径9.8cm、底部は4面ヘラによるカットがあり、やや小型である。10も壺身で、ほぼ完形品である。口径13.0cm、器高5.3cmで、底部にはヘラで削った跡がある。11は高壺の壺部のみである。推定口径12.0cm、口唇部はわずかに外反しており、立ちあがり部が肥厚している。12は高壺の完形品である。口径10.6cm、器高9.2cm、頸径8.4cmで、背が低く、脚部には



第20図 土師器・須恵器実測図

3個の透しがある。口唇部はわずかに外側に張り出し、脚部先端は内反している。13は口縁部のみの小片で、壺形土器とおもわれる。推定口径11.3cmであり、口縁部はわずかにたれさがっている。

古 銭（第21図）

寛永通宝と判読できるものが3枚出土した。



第21図 古銭拓影

（鹿 見 啓太郎）

VII. 総括

以上みてきたように、円明寺遺跡は、出土する土器・石器ならびに瓦類から縄文時代早期の遺跡と歴史時代の寺院跡とが複合した遺跡であることがあきらかになった。ここでは、これらの出土遺物を通して縄文早期遺跡および寺跡遺構に関する2、3の問題についてふれてみたい。

(1) 縄文早期遺跡についてみれば、本遺跡発見の土器は、押型文土器、無文厚手土器、条痕文土器の3つのタイプからなりたっていることがあきらかになった。

県下における縄文時代早期の遺跡としては芦品郡新市町常金丸宮脇遺跡①が古くから知られており、その後、安芸郡矢野町矢野小学校校庭遺跡②、福山市柳津町馬取遺跡③、広島市牛田町早稻田山遺跡④、佐伯郡五日市町利松住吉遺跡⑤、など瀬戸内海沿岸部での発見があいついでいる。一方中国山地一帯においても、山県郡戸河内町上殿小学校校庭遺跡⑥、比婆郡高野町建釜遺跡⑦、比婆郡東城町・神石町の帝釈陥遺跡群⑧などが新たに発見されつつあり、その数は現在のところ30余か所にもおよんでいる。

とくに帝釈陥遺跡群においては、他の遺跡が縄文時代早期の単純遺跡であるとの異なり、縄文時代早期から古墳時代にまでおよぶ長期間にわたる遺跡であることがあきらかにされており、規則正しい層序をもとに、中国地方縄文式土器編年の標式的な遺跡となっている。

瀬戸内沿岸部の縄文早期遺跡については、すでに早稻田山遺跡や利松住吉遺跡の調査により、押型文土器の編年や使用石材と産出地との関連性あるいは立地等の問題について論述されてきているところである。

すなわち、早稻田山遺跡については、出土する縄文式土器は、燃糸文土器1点を含んでいたが、押型文土器(30%)条痕文土器(20%)無文厚手土器(50%)の比率であると指摘されており、また、押型文土器と無文厚手土器との関係では時期が下るにつれ無文厚手土器の比率が高くなるという見解や⑨、押型文土器と条痕文土器との組みあわせの問題から、瀬戸内東部の黄島貝塚(岡山県岡山市牛窓町)や小葛島貝塚(愛媛県)の押型文土器よりは後出のものとされている⑩。また利松住吉遺跡では出土する縄文式土器の92.5%は無文厚手土器で、押型文と条痕文土器は、わずかに7.5%にすぎないことから、早稻田山遺跡よりは時期的に新しいものと指摘されている⑪。

円明寺遺跡においては出土した土器は、わずかに158片にすぎず、また個体数や層序につ

いても詳らかでないところが多いが、出土率は、押型文土器（46%）条痕文土器（38%）、無文厚手土器（15%）となっており、時期がさがるにつれ無文厚手土器の比率が高くなることが首肯されるならば、本遺跡は、利松住吉遺跡よりは先行するものと推定できよう。しかしながら、早稻田山遺跡との関係では、無文厚手土器の比率のみからいえば本遺跡が先行するものと考えられるが、本遺跡出土の条痕文土器は、器原があつく無文厚手土器に通ずるものであること、また早稻田山遺跡からは、1点ではあるが撫糸文土器が発見されており、撫糸文・押型文・条痕文の関連は、撫糸文+押型文+無文→撫糸文+押型文+条痕文+無文→押型文+条痕文+無文という時期的推移の形をとるといわれていることから考えれば早稻田山遺跡が先行するものと考えることもでき、この問題については今後なお検討を要するものといえよう。

つぎに、本遺跡出土の石器についてみれば、石錐、スクレーパーが多く、他に、尖頭器、磨石などがみられたが、その石材はほとんどが安山岩であった。

潮見浩氏は、瀬戸内東部の黄島・小葛島などで使用された石材がサヌカイトであることと大分県早水台遺跡などでは珪石・姫島産黒曜石が中心となっていることより、大略2つの石材を中心とした分布図をみるとめられ、これに新たに広島・山口県境の鬼ヶ城山・横山を中心とするグループを想定されている。このような事実に立脚してみれば、円明寺遺跡は鬼ヶ城山・横山に近く（北西約25km）ここを中心とするグループに含まれることになろう。ただ、石質の鑑定をうけていないため原産地をあきらかにすることはできないが、やや質のおとる姫島産の黒曜石とおもわれる石錐1点が出土していることは瀬戸内海西部との接触が考えられるところであるが、将来的な問題として十分留意しておく必要があろう。

このように、本遺跡から出土する遺物は、石器・土器に限られ貝類などの発見はなく、貝塚を形成しない遺跡であることがあきらかになった。このことは、広島周辺の早期の遺跡である早稻田山遺跡、利松住吉遺跡についても同じ傾向をもつことがしられている。これらの遺跡の立地条件をみて、円明寺遺跡が海拔高約50m、利松住吉遺跡約20m、早稻田山遺跡約30mと、比較的採集の容易な地点に立地しているにもかかわらず貝塚を形成していないことは、瀬戸内海東部の黄島、井島、小葛島遺跡が貝塚を形成しているのとは大きな違いがあり、このことから縄文早期においては瀬戸内海の西と東では、自然環境の相当の違いがあったものと推測されている。

このように、円明寺遺跡においても、貝塚が形成されていないことや、規模の小さい単純遺跡であることなどから、狩猟を基盤とした漂泊的な生活が営まれていたものと推定できるし、また石材の産出地からみても瀬戸内東部との交易はうすく、瀬戸内西部ないしは九州との交渉をもった人々の生活を想定することができよう。

(2) つぎに円明寺跡についてみれば、文政8年（1825）に編纂された芸藩通志卷53の寺院の項に「圓明寺、三宅村にあり、三宅山々王院と稱す、弘法の開基と云傳ふ、建保年中、讀岐の普通寺、僧有雅再興、一説に、有雅開基なり、寺に傳る所、古は境内廣く、殿堂庫樓も備り、末寺凡12ありしが、替慶年久しく、延寶延享中、広島県下、西福院より堂坊を修め、享和年中、僧一刀、厨庫を造り来住す、寺内に、一品仁助親王の塔あり、墳墓の部に詳なり@、」と記載されており、明治2年（1869）巳五月の「當村圓明寺記録寫シ」では、「——往古火災にて、堂社悉く類焼み、旧記も委からず、寺跡も今は田畠民属となりて跡かたもなし、その昔圓明寺は七堂伽藍の奥場なるともうし、その後福島御時代の堂舍

東西六拾間余、南北七拾間余

一、觀音堂五間四面	一、護摩堂三間四面
一、鎮守二社壇間九尺	一、同許殿二間五間
一、大師御影堂二間四面	一、客殿三間八間
一、庫裡九間七間	一、鐘樓二間四面
一、山門三間五間	——」

とあり、その後、類焼して延宝年中には、「一、觀音堂二間四面一、鎮守山王推現八幡宮小社一字一、僧坊乘行三間桁行四間半」のみが新たに建立されたと記されている。

本寺の創建年代については、弘法大師の開基ということについては多少疑問があるとしても、「建保年中、讀岐の普通寺、僧有雅再興、一説に有雅開基なり」の事項には注意する必要があろう。今回の発掘調査においては、鎌倉期に比定される土師質土器および瓦類が出土しており、これだけで建保年中の創建になるものと断定することはできないにしても、円明寺の創建時期を鎌倉時代に想定することができよう。

ただ調査によって検出された遺構は、後世の削平が顕著であるため、構築の時期や建物の規模などについてあきらかにするだけの資料をえることはできなかったが、前記した「當村圓明寺記録寫シ」にみられる「福島御時代の堂舍」の山門を規模等の点からそれに比定することができ、江戸時代初頭を前後する期の遺構に相当するものと考えられる。石敷の間から室町期の備前焼太甕の口縁部が出土していることは、その存続時期について一つの示唆を与えているものであろう。

(3) このほか、本遺跡の出土遺物の中には、弥生式土器、土師器、須恵器などとともに有孔円板があった。滑石製有孔円板の出土例は、県下においては、三次市三若町三若古墳群@、双三郡吉舎町三玉大塚古墳@、深安郡神辺町國成古墳@、同郡神辺町上御領中島地区@の4ヵ所が知られていた。

円明寺遺跡出土の有孔円板は単独出土で、その祭祀的な性格については不明であるが、あえて推測するならば、本遺跡のある佐伯郡には、古代大和国家により「佐伯部」が設置された地帯であり、また古代山陽道の要衝の地として政治、文化の中心地であったと想定されること。また、芸蕃通志によれば、本遺跡付近に「屯倉」がおかれていたともいわれていることなどから、この有孔円板も、これらとの関連性が強いものと推定できよう。

(河瀬 正利・是光 吉基)

- 注 ① 豊元国・桑田五郎「備後宮脇石器時代遺跡について」(『吉備考古』第77~第80号、昭和26年~昭和28年)
- ② 木下 忠「矢野町の墳」(『矢野町史』上巻 矢野町 昭和33年)
- ③ 松峰寿和・瀬見 浩・木下 忠・藤田 等・本村豪章「松永市馬取遺跡調査報告」(『広島県文化財調査報告』第4集広島県教育委員会 昭和38年)
- ④ 瀬見 浩「広島市早稻田山遺跡の発掘調査報告」(『広島考古研究』第2号 昭和35年)
- ⑤ 川越哲志「広島県佐伯郡五日市町利松住吉遺跡の調査」(『広島大学文学部紀要』第28巻1号 昭和43年)
- ⑥ 松峰寿和・瀬見浩「先史時代の広島地方」(『新修広島市史』第1巻総説編広島市役所 昭和36年)
- ⑦ 瀬見 浩『建釜遺跡発掘調査報告』 昭和43年
- ⑧ 帝釈天遺跡群発掘調査団編「帝釈天遺跡群の調査研究 1. 2. 3」 昭和39年~昭和43年
- ⑨ 雄木義昌・木村幹夫「西日本の縄文文化」(『日本考古学講座』第3巻 昭和31年)
- ⑩ 前掲①と同じ
- ⑪ 前掲①と同じ
- ⑫ 前掲①と同じ
- ⑬ 前掲①と同じ
- ⑭ ヶ
- ⑮ 『芸蕃通志』第1巻芸蕃通志刊行会 昭和38年
- ⑯ 瀬見浩先生の御教示による。
- ⑰ 高橋鶴児「古墳発見石製模造器具の研究」 大正8年
- ⑲ 村上正名『国成古墳発掘調査報告』(神辺町文化財資料シリーズ 昭和39年)
- ⑳ 広島県教育委員会『広島県埋蔵文化財包蔵地地名表』 昭和36年

図 版



a. 円明寺遺跡遠景



b. 円明寺遺跡近景



a. J-3区東壁断面図(aは包含層)



b. I-6区北壁断面 (aは包含層)



1



2

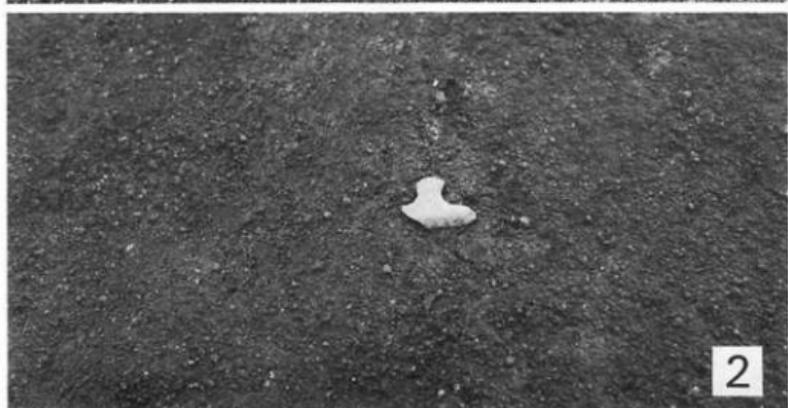


3

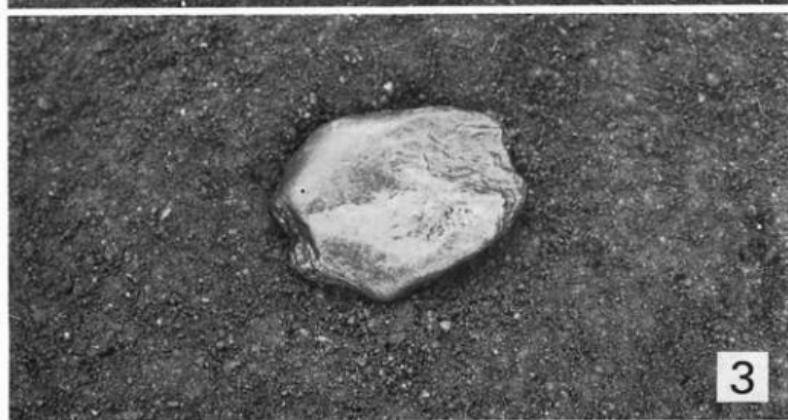
遺物出土状態 (1.押型文土器 2.条痕文土器 3.石錐)



1



2



3

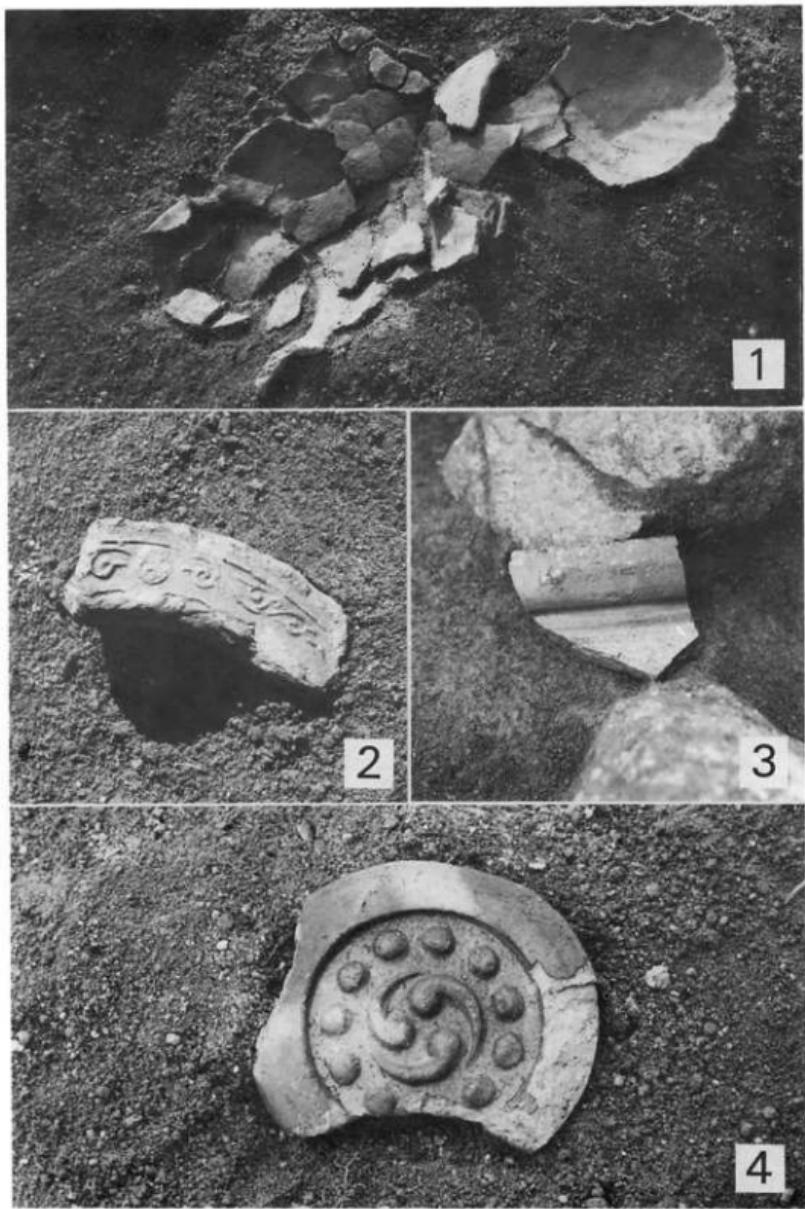
遺物出土状態 (1.石鏹 2.石匙 3.石鍾)



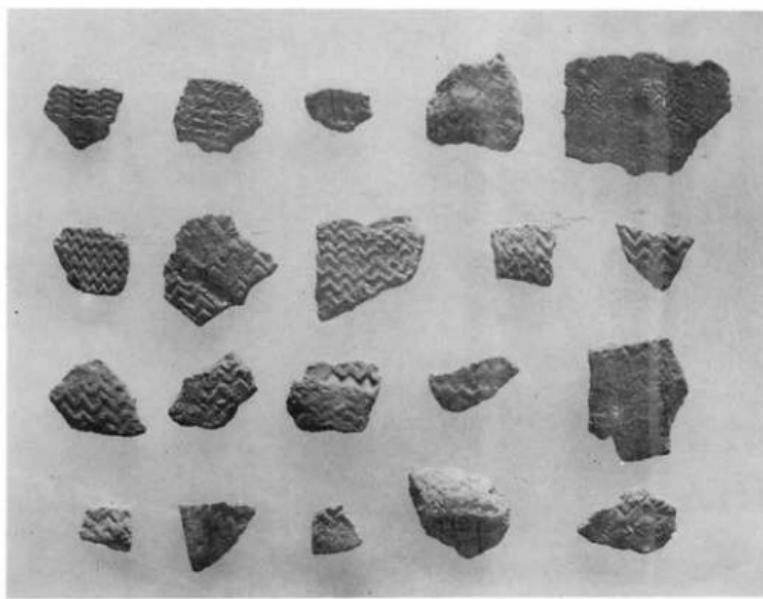
a. 建築址遺構 (1)



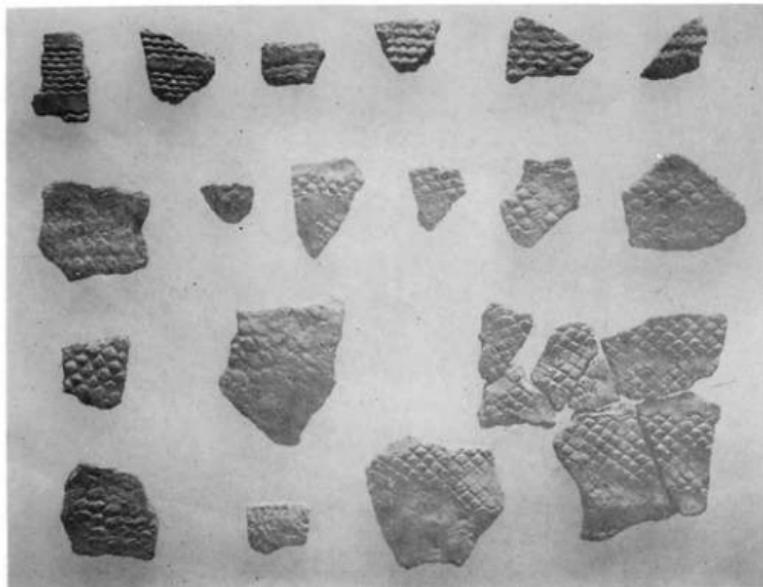
b. 建築址遺構 (2)



遺物出土状態 (1.土師器 2.軒平瓦 3.備前焼 4.軒丸瓦)



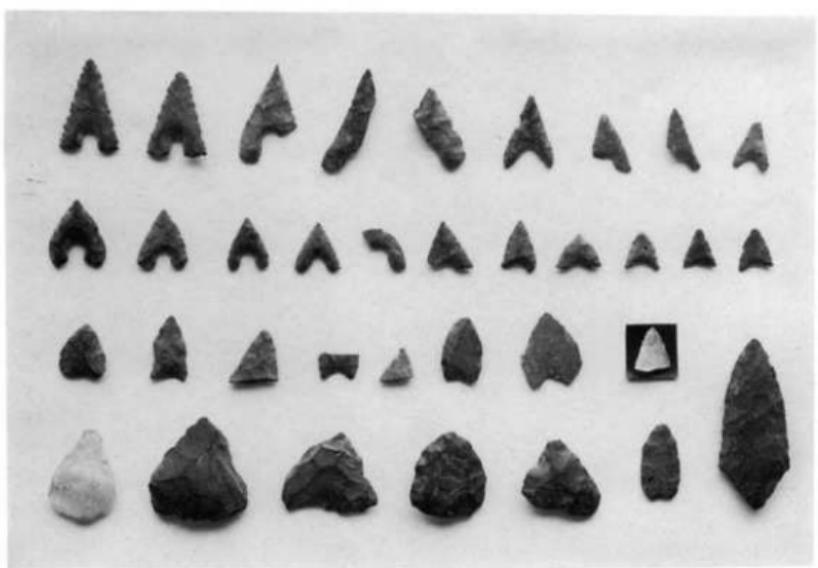
a. 山形押型文土器



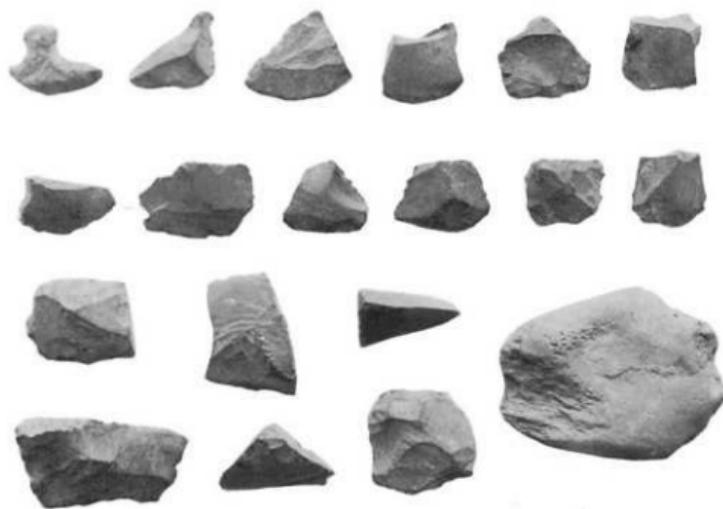
b. 精円押型文土器



a. 条痕文・無文土器類



b. 石鏃・尖頭器



a. 石ヒ、スクレーバー石錐



b. 土師質土器



a. 軒丸・軒平瓦



b. 軒丸・軒平瓦・鬼瓦



a. 印 判



b. 陶器・瓦質土器



a. その他の石製品・土製品



b. 弥生式土器・土師器・須恵器

昭和46年3月31日

円明寺（延命寺）遺跡発掘調査報告

発行 幸島県教育委員会

印刷 株式会社 柳盛社 印刷所

所幸島市東白島町8番23号

電話 ⑧-2148番